

自らことを思む習があるから、かこつけて留めうと思へど、生憎、近所隣で、嘘もせぬことよとなり。

(九三八)

(評)奈良時代には、鼻ひれば、待人來るといひ、又、人の思ふ時は、嘘るともいへり。この頃は、又、鼻ひれば、出で行くことを思むといふ迷信ありけるなるべし。

作者の名、上のもこれも、一本云々とあり。奏覧の原本にあるまじきことなり。定家卿校正の時書き加へらるともいへり。このわたり、皆、よみ人しらすなるべし。

紅にそめしこゝろもたのまれず人をあくにはうつるてふなり

(釋)〇なく、匂くに、灰汁をかく。紅は、葉の灰汁にて洗へば、色の褪むるものとぞ。

一首の意は、紅のやうに、深い色に染めこんだる人の心も、たのみにはならぬ、なせなれば、かの紅も、灰汁に漬ければ、色が變るといふやうに、人を飽くといふ氣が出ると、つい、心が變るといふことであるワイとなり。

(評)思の深き由を、人のいひ誇らへより、その紅の深き色とても、あてにはならぬ物といひくたしたるなり。

二句、六帖に、染めしころもとあり。

いとほるゝわが身は春の駒なれや野飼がてらに放ちすてたる

(釋)〇野飼がてら 顯註に、馬をも牛をも、放ちて飼ふをば、野飼といふ、それに寄せて、人を思ひ放つをも、野かふといふなりとあり。景樹の説に、退きのきを延べて、かふといふにて、退きがてらに遠ざかる譬なりといへり。後撰集に、「みちのくの尾駁の駒も野飼ふには荒れこそまされなつくものかは」など、まことに、退く意ありと見へたり。

一首の意は、人に厭はるゝ自分の身は、春の駒かして、丁度、春駒を、野飼がてらに放しすてにしておくやうに、かの人、客氣せぬやうなる顔をして、その身を退きがてら、自分を見すてて、一向かまはぬワイとなり。

鶯のこぞのやどりのふるすとやわれには人のつれなかるらむ

(釋)〇鶯のこぞのやどりの 古巢といはむ序。〇ふるす 古巢に、舊すをかく。

一首の意は、鶯の去年の宿を古巢といふやうに、かの人、自分を舊いものにして、見捨つるといふて、それで、かうも氣強うするのであらうかとなり。

(九三九)

(九四〇)

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやく霜夜をわが獨ぬる

(釋)〇さかしら 賢しらになり。かしこたての意。〇さやく さやくと、さやかに鳴ること。

一首の意は、人に見捨てられても、ぬからぬ顔に、夏は、人まねに、いつそ、獨寝の方がよいなどい
うて紛はしても見たが、このやうに、笹の葉の、さやくと鳴る寒い霜夜をも、自分が、獨寝るこ
とよ、これは、いかにも堪へやうがないワイとなり。

平 中 興

あふ事の今ははつかになりぬれば夜深からではつきなかりけり

(釋)〇はつか 僅に、二十日を寄す。〇つき 便宜に、月を寄す。

一首の意は、何時も、二十日になれば、夜がふけねば、月がないが、自分も、かの人に逢ふ事が、
人目のうるさに、今では、わづかになつたによつて、たまた逢ふにも、人目の無い夜ふけでな
くては、便宜がなくなつたワイとなり。

左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山にこもるとも後れむと思ふ我ならなくに

(釋)〇もろこしの吉野の山 吉野山は、山深くして、世を厭へる人などの、よく籠る所なれば、假

令、諸越の、さる深山に籠るともと、設けていへるなり。

一首の意は、貴方が、大和の吉野山は、勿論、假令、唐の吉野山の奥へ引き込まうとも、どこま
でも暮うてこそゆけ、あとに残つて居ようと思ふ自分ではないものをサ、それを、心の淺いやう
に思はるゝは口惜しいワイとなり。

(評)戀五に見えたる、伊勢の御が、仲平朝臣におくれる、「三輪の山いかにまち見む云々」の歌の返
しとして、これを、伊勢集に擧げたるより、仲平の作とし、さて、仲平は、後にこそ、左大臣にも
なりたれ、延喜の頃は、未だ微官なればとて、「左のおほいまうち君」の署名を疑へるものあるは、
伊勢集に泥めるなり。かの集は、素より、しどけなきものにして、勅撰の面正しきものにあらず。
これをおきて、彼を採るは、本末を誤れるものぞ。「三輪の山」の返しにもあらず、仲平の作にも
あらず、左大臣藤原時平の詠なり。

な か き

雲はれぬ淺間の山のあさましや人のこゝろを見てこそやまめ

(釋)〇雲はれぬ淺間の山の 譬喩をかねて、あさましの序としたり。淺間山は、信濃國北佐久郡な
る噴火山。〇人の おのれをさしたり。

一首の意は、淺間山の噴き出す烟が、雲となつて晴れすにあるやうに、疑の晴れもせぬに、早く
も退いてしまふとは、あまり怪しからぬ、肝のつぶれたことよ、私の心を、とくと見たうへでサ、

(九四一)

止むなら止めたがよいワイとなり。

(九四二)

伊勢

なにはなる長柄の橋もつくるなり今はわが身を何にたとへむ

(釋)○つくる 造るの意。盡くるに解くは當らず。この事、序文中、「長柄の橋もつくるなりときく人は」の條に論じたり。

一首の意は、これまで、舊い物のためしに引いたる難波の長柄の橋も、新しう出来るのである、今はもう、人に飽かれて、舊い物となつてしまふ自分の身を、何に譬へうぞ、何にも譬ふる物も無くて、心の慰みやうも無いワイとなり。

初句、金玉集に、つづくにのとあり。

よみ人あらず

まめなれど何ぞはよけく刈萱の亂れてあれどあしけくもなし

(釋)○まめ 眞實、或は、眞面目などの意。○何ぞはよけく よけくあらむの略。○刈萱の 刈萱は、萱の一種。その葉細くして、亂れがちなが故に、亂れて、といはむ序としたり。眞淵、宣長などが、刈る萱の意に見たるは非なり。

一首の意は、自分は、随分、實體であるけれど、それが、何のよい事があらうぞ、現に、かの人、自分を頼みにせぬではないか、かの人などは、刈萱の亂れたるやうに、あちこちに、心を移し

て亂れて居るけれど、それでも、さのみわるいやうな事もないワイとなり。

おきかせ

何かその名のたつ事をしからむありて惑ふは我ばかりかは

(釋)一首の意は、何のその、名の立つことが惜しからうぞ、戀路のならひ、よくも無いと知りながら迷ふのは、自分ひとりかまあ、自分ばかりでは無い、皆さうであるワイとなり。

いとこなりける男によそへて、人のいひければ。

くそ

よそながらわが身にいとよるといへば只いつはりやすくばかりなり

(釋)いとこなりける云々 従弟なる男に、情交のあるやうによそへて、世の人のいひ騒ぎければの意。但、いとこなりける男のけるは、要なき辭なり。こは、顯註に、「この歌は、いとこといふ男によそへて、人のいひければ、女のよめるなり」とあるを見れば、或は、もと、いとこといふ男にとありけるを、いとこと寫し誤りたるより、心も得ぬ者の、濫に、いとこなりける男と書き改めもやしけむ。こは、試にいふのみ。姑く、本文のままにて、解を下しつ。○いとこのよる 従弟の寄るに、糸の懸るを寄す。○いつはり 偽に、針を寄す。○すく 着ぐること、好色を寄せたるものとま

(九四三)

で見るとからず。
一首の意は、この頃、よそながら聞けば、何か、従弟の男が、自分に附いて居るといふ、根も無い噂をするから、そんな糸の纏つたのは、外に、仕方が無い、只、偽といふ針に、すげ通すばかりであるはサとなり。

題あらす

さぬき

ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそはてはなげきの森となるらめ

(釋)○ねぎ言 願言なり。○なげき 歎きに、木をかく。なげきのは、歎がの意にて、なげ木の森と讀くにはあらず。

一首の意は、多くの人が歎き願ふ詞を、さやうに、お聞き入れなされたであらうと思ふ社の社はサ、しまひには、なげきといふ木の茂る森になるであらうワイ、といふが表面の意にて、人のいひ寄るのを、さやうに、無暗と聞き入れて、誰彼なしに逢ふたであらう人がサ、しまひには、歎きがしげうなるであらうワイ、といふが裏面の意なり。

(評)さて、その人は、作者自身なるべし。

大 輔

なげき樵る山とし高くなりぬればつら杖のみぞまづつかれける

(釋)○なげき 歎きに、木をかく。○つら杖 頰杖なり。

一首の意は、いろ／＼の歎きが、山のやうにサ、高く積つたから、何ぞ思ふと、頰杖ばかりサ、突くやうになることではあるワイとなり。

(評)木を樵り來て、山の高くて、道すがら、杖を突くをもて仕立てたり。

よみ人あらず

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり

(釋)○なげき 歎きに、木をかく。○足引の山のかひといはむ序。山には、峽あれば、詮(甲斐)にかけたるなり。

一首の意は、あまりに、木を樵り積むと、山の峽が埋つてなくなるやうに、自分は、戀ゆるに、歎きばかりが積つて、その歎き甲斐がなくなつてしまひさうな様子だワイとなり。

○

入こふることを重荷と擔ひもてあふごなきこそ佗しかりけれ

(釋)○あふご 柄に、逢ふ期をかく。柄は荷ひ棒なり。

一首の意は、戀を、重荷と擔うて居るから、それなら、柄がある筈なるに、その柄といふ逢ふ期が

ないのがサ、難儀なことであつたワイとなり。

(九四六)

よひの間にいでて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

(釋)○よひの間にいでて入りぬる三日月の 三日月は、片破れなるより、われてといはむ序としかり。○われて わりなくの意。わりなくは、ことわりなくの略にて、無理やりに、又は、強ひてなどいふ意に似たり。

一首の意は、宵の口に、一寸出て這入つてしまふ三日月の、片破れといふやうに、わりなく無上に、物思をする、この頃であることよとなり。

○

そへにとてとすればかくすればあないひ知らずあふさきるさに

(釋)○そへにとて 契沖いふ、後撰集に「けふそへに」といへる詞あるは、副の意にて、けふそへにいふ詞なれば、同じからず。古今著聞集第十六、法師の、角力とる事をいへる條に「そへに」と答ふ」といふ詞見ゆ。それよといふ詞に近しといへり。○の説従ふべし。○あふさきるさに 合ふさき

さなり。さて、往くさ來さの意ともなり、轉りては、往き違ひ、かけ違ひなどの意にも用ゐられたるなり。諸註、皆いひ足らず。

一首の意は、さうだと、一つ思案をきめてして見ると、一方に差支ふるし、それならばと、又、その方へ片づいてして見ると、又、こちらの一方に差支ふる、あふ、何というてよいやら、いひやうも知らぬワイ、とかく、世の中の事は、あちこち往きちがひのものであつてサとなり。

(評)かくすればとありとあるべきを、上にゆづりて略きたり。

○

世の中のうきたび毎に身を投げばふかき谷こそ淺くなりなめ

(釋)一の意は、自分が、世の中の愛く思はるゝ度毎に、世を厭うて、身を投げうなら、深い谷がサ、その死骸でつまつて、淺くなつてしまふであらうワイ、このやうに、愛い事の多い世の中なればサとなり。

在原もとかた

よの中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人に恨みらるれば

(釋)一首の意は、心があれば、世の中そのものは、どんなにか苦しいと思ふであらうワイ、かう、澤山の人に、世中が恨めしい〜と恨まるゝからサとなり。

(九四七)

四句、六帖に、よろづの人にあり。

(九四八)

よみ人あらず

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき

(釋)〇やさしき 羞しきこと。

一首の意は、一體、自分はまあ、何をして、このやうに、年寄つたのであらう、何一つ仕出したる事もなしに、寄つてしまつたる年の思はくがサ、心はつかしいワイとなり。

三句、朗詠に、老いにけむ、結句、六帖に、ことあやうしくあり。

おきかぜ

身はすてつ心をだにもはふらさじ遂にはいかゞなると知るべく

(釋)〇はふらさじ はふるは放ち捨つるなり。物を擲つを、俗に、はうるといふもこれなり。零落の意にもなれど、こゝには當らず。

一首の意は、とても、この世の望は、思ふにかなはぬ故、この身は、思ひ切つて無い物として、捨てたワイ、しかし、せめて、心だけなりとも、大切に持つて、捨鉢といふやうに、ふり捨てまいぞ、流石に、捨てたるこの身の行末が、どのやうになるかと見届けらるゝやうにサとなり。結句、家集に、なると見るべくあり。

ちさと

白雪のともになが身はふりぬれど心はきえぬ物にぞありける

(釋)〇ともに 伴侶の意。白雪と共にの意にあらず。

一首の意は、白雪の友達として、自分の身は、雪の降るといふやうに、ふるび老いたれど、流石に、雪の消ゆるやうには、心は消えぬものでサ、やはり、若い時に變らぬワイとなり。

題あらず

よみ人あらず

梅の花さきてののちのみなればやすきものとのみ人のいふら

む

(釋)〇み 實に、身をかく、〇すきもの 酸き物に、好色者をかく。

一首の意は、梅の花が咲いて後になる實は、酸いものであるが、そのやうなるこの身であればかして、自分を、好色者だくとばかり、人がいふのであらうワイとなり。

法皇西川におはしましたりける日さる山のかひにさけ

ぶといふことをよませ給うける。 みつね

わびしらにましらな鳴きそ足引の山のかひあるけふにやはあ

(九四九)

らぬ

(九五〇)

(釋)法皇西川におはしまし 雜上「芦たづの立てる川邊を云々」の條を見よ。さる、山のかひにさけぶは、猿叫山峽にて、鶴立洲と同じく、詩題なり。○ましら 猿のこと。翻譯名義集に「摩斯陀、或、末迦陀、此云彌猴」とあり。○かひ 詮(甲斐)に、峽をかく。

一首の意は、猿よ、そのやうに、難儀さうに啼くなよ、今日は、法皇様の御幸があつて、この山のありがひのある日ではないことか、ほんに、甲斐ある有難い日であるぞよとなり。

(評)わびしらの啼くといへるは、題の趣によれるなり。詩には、猿聲を悲しきものに作り、宜都山川記「巴東三峽猿鳴悲、猿鳴三聲淚沾裳」、白氏文集「三聲猿後垂、鄉淚」の類、屈指に違あらず。さて、眞淵は、これを、意詞たはれたるところなくめでたしとして、この部に入りたるを疑へり。想ふに、わびしらの音を反復すべく、マシタの梵語を、ましらと轉じて、口合にしたるか。或は、萬葉集に、ましの助辭に、猿の字を填てたれば、早くより、マシとのみいひならへるを、わざと、ら文字を添へて、疊音にしたるならむ。この作者、時に、かやうの戲をなすことあり。比良の山を隠して詠まむとは、「かくてのみわが思らのやまざらば」と、思らの新熟語を作りぬ。ましらも、この儂ならむこと、必せり。さては、なほ俳諧なるべし。

題あらず

よみ人あらず

世を厭ひこの木ごとにたちよりてうつふし染の麻のきぬなり

(釋)うつふし染 うつふしは、俯臥にて、假寝のさまなり。空五倍子をかく。宣長が、空臥にて、空割の全なり、丸寝と同じといへるは、強ひたり。五倍子は、ぬるでの木に産する蟲の糞にて、そのうちうつふなれば、空五倍子といへるなり。これにて、黒色を染む。○麻のきぬ 僧衣なり。一首の意は、この衣は、浮世を厭うて、所定めずあるく僧の、どこでも行きかゝり次第、樹蔭樹蔭に立寄つて、俯臥に假寝することろの、空五倍子染の麻の黒衣であるワイとなり。

(評)五倍子染の僧衣を贈るとて、詠めるなるべし。結句、六帖に、苦のころもぞ、遍照集に、麻の袈裟なりとあり。又、大和物語には、上句「霜雪のふるやの中にひとり寝の」とありて、遍照の詠とせり。但、本文のを正しとすべし。

(九五二)

古今和歌集卷第二十

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀には、つかへまつらめ萬代までに

(釋)大歌所 西宮抄に、「大歌所、在_三圖所寮東_二新嘗時供奉、有_三親王、大納言、非參議、六位別當、
琴師、歌師十生_二とあり。邦樂なる神樂、風俗等の謠物を掌れる官人、歌人等を召し置かるゝ所
なり。それを習ひ傳ふるにも、こゝにて教ふるなり。江家次第に、大歌、小歌の稱見ゆ。大歌は
天朝に用ゐ給ふをいひ、公ならず、世に、専ら歌ふを、小歌といふ。又、謠ふには、更に撰びて
うたひ、その曲調をも作ることもありとす。大嘗會、新嘗會の時には、大歌の人奏樂するなり。雅樂
寮の、専ら唐風の舞樂を司るとは異なれり。この卷の歌ども、皆、こゝにて歌はれたるものなれ
ば、御歌といへり。○おほなほび 紀記に、伊邪那岐大神の、夜見の國より歸りまして、その禍を
直さむとて成りませる 神直毘大直毘神の_{カミナホビオホナホビ}こと見ゆ。即ち、その大直毘神の御祭の時にうたへる
歌なり。後にも「ひるめの歌」とあるに准すべし。催馬樂の韓神の詞に、「おほなほみ」とあるも同

じにて、もとは、この神の祭の歌なりしなるべし、これを、大直日の義とし、神を祭りはてて後の直會の日とする説あれど、諾ひ難し。○たのしきをつめ 樂しきを積むに、木を積むを寄せたり。木を積むは、年の正月十五日、百官、悉く薪を奉る、これを御薪といふ。その數の定めは、延喜式に見えたり、

一首の意は、この新しい年の始に、何時も、この通りにサ、今から、千年の先までをかけて、樂しい積木を、お庭に積まうワイとなり。

(評)續日本紀、天平十四年正月に、天皇、大安殿に出御ましまして、五節の舞等奏しをはりて、諸臣に、宴を賜へる時、六位以下の人々、琴をひきて、「新しき時の始にかくしこそつかへまつらめ萬代までに」と歌へりしこと見ゆ。左註、日本紀とあるは、誤なり。この頃は樂しきをつめの巧を添へて、時調に歌ひかへしならむ。結句のつめ、契沖が、一たび、古き上手の書けるへ。文字は、つに紛ひ易きより。後の人の寫し誤れるにて、へめなるべしと唱へしより、先覺、皆、これに従へり。本文のまゝにて、よく聞えたるを、猶、異説を立つるは、好んで、平地に、波瀾を起すものといふべし。

この大歌所の歌どもの端書、まどけなくして、事行かぬふし多く、上なる卷々のにふさはず。思ふに、もとは、端書なくして、只、歌章どををかきつらねたるにとゞまれりけむを、後人、樂府の本によりて書き入れしとおぼし。されば、必ず、詞書によれりて釋かむは、恐ならむ。

ふるきやまとまひの歌

あもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆる哉

(釋)ふるきやまとまひ もとは、大和の國振の舞なるべし。大嘗會の己の日に、豐樂殿にて、さまざまの舞ある中の一つなり。されど、この時のみならず、神社の祭にも演せらる。こゝに、ふるきといへるは、大和舞の歌章中のふるきなり。○まもとゆふ 楚結ふなり。楚は、若木の茂り立ちたるもの、これを刈りて、薪にすべく、藤葛もて結ぶことあるより、葛につゞけて、枕詞とせり。○かつらき山 大和國葛上郡と、河内國石川郡とに跨る。

一首の意は、あの葛城山にふる雪の、ふらぬ間のないやうに、何時といふことなしに、君のことが、心にかゝつて、忘るゝひまのないことよとなり。

(評)三句までは序にて、戀歌なり。構想は、天武帝の、

三吉野の耳我の嶺に、時なくぞ雪はふりける、ひまなくぞ雨はふりける、その雪の時のなきがごと、その雨のひまなきがごと、隈もぢらす思ひつゝぞ來し、その山道を。(萬葉卷一)と同じ。まかも、詩形小なれば、曲折拍合の妙を缺けり。殊に、結句、格卑く、語に力なし。平安朝となりては、頭大尾小の體多きは、七五調の結果ならむも、かやうなる凡句輕句を以て結果するは、完作をなす所以にあらず。されば、同じ事にも、

うち渡す竹田の原になくたづのまなく時なくわが戀ふらくは(萬葉卷四)
の如く、いはまほしきなり。

あふみぶり

(九五六)

近江よりあさ立ちくればうねの野にたつぞ鳴くなるあけぬこの夜は

(釋)あふみぶり 古事記に、夷振、宮人振、天田振などあると同じく、管絃に合はせて奏せし歌には、おのゝ、一定の曲節あり。そを、何振と名づくるなり。なほ、何節といはむが如し。こゝに近江振といひ、次に、水莖振、四極山振といへるは、樂府にて呼べる名にて、たゞ、その歌の詞を取りて、假に、その節に名づけたるのみ。その國の風俗の歌曲なりなど思ふべからず。○うねの野 近江國蒲生郡にありて、今、蒲生野といふ。

一首の意は、あふみから、今朝、はやく立つてくれれば、今、うね野に、あれ、鶴がサ鳴くは、さあ、夜が、もう明けたワイとなり。

(評)近江よりは、大らかに詠めりとすべけれど、或説に、今、うね野の二里ばかりに大見といふ所あり、昔の順路なり、假字は違へど、聲の通へば、この誤りたるにや、といへるも捨て難く覺えしが、更に考ふるに、あふみは、必ず淡海にて、琵琶湖をいへるなるべし。即ち、淡海の海の邊なる旅館を、夜深く立出でつる人の詠めるならし。うね野のあたり、古は、大湖の水近かりけむからに、人里稀に、鳥雀の影絶えて、鷺鶴類の涉水鳥のみ、多く栖息したりしならむ。曉行幾里、こゝに至りて、天、始めて白く、聞き得たる鶴の聲、認め得たる鶴の影、旅情、今こそ慰みつべけれ。

あけぬこの夜はの倒裝は、四句切れなる、上の強き調に對抗して、千斤の力量あり。この一語、また、下し易からず。わびしみて、夜の明くるを下待たたる趣も、よりて見らるゝにあらずや。されば、後人、好んで、この句を襲用したれど、畢竟、優孟の衣冠なることは、代々の撰集を見て知るべし。要するに、高古にして、神韻縹渺、一唱三嘆に値するものなり。

みづぐさぶり

水莖の岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

(釋)○水莖の岡 近江なり、又、筑前なりといふ説もあれど、宣長が、水莖のは、草木の瑞々しき莖の稚きの意にて、その稚は、ヲカと通へは、岡の枕詞とせりといへるに従ふべし。○岡の屋は、山城國宇治郡なる地名なりといへり。○妹 妻女をいふ。○あれ 我の古言。○朝け 朝明の略○はも 嘆辭。

一首の意は、この岡の家で、妹と我と寝て、夜の明けたる今朝の、この霜の降りやうはまあ、一方ならぬワイとなり。

(評)昨夜は、二人して寝たれば、かほど、冷ゆる夜とも思はざりしがの餘意あり。蓋し、岡邊は、おのづから、風さゆる處なれば、その霜とても、雪の如くなりしならむ。たまゝ、その屋形に相宿せし人、よべの菴夢の暖なりしに思ひ較べて、覺えず、驚嘆の語を洩らせるなり。寝ての朝け

(九五七)

造語簡淨なり。霜のふりはもの歌後の詞、想像の餘地無窮にして、情致の含蓄を多大ならしむ。結句、古き一本に、雪のふりはもとあり。

(九五八)

あはつ山振

あはつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟

(釋)この歌、元來、萬葉集卷三、高市連黒人が羈旅歌八首の中の第三「四極山うち越え見れば笠縫の島こぎ隠る棚なし小舟」を歌ひひがめたるものにて、このまゝにては解き難し。姑く、萬葉に據りて釋すべし。○しはつ山 舞津國住吉より、東の方喜連といふところへ行く道の間に、岡山の卑き阪あるこれなり。喜連は、吳の訛にて、雄略紀に、十四年正月、吳人の參れるところに「泊住吉津、是月、爲吳客、通磯齒津路一名吳坂」とあり。○笠縫の島 攝津國東成郡深江村なるべし。管田多くありて、その質、他よりも勝れ、里人、昔より笠を縫ふことを業とすとぞ。この村、土地高くして、あたりは卑ければ、いにしへは、皆、ひろき沼江にて、この村のみ、島にてありしならむ。かくて、笠縫の島の名ありけるなるべし。

一首の意は、四極山を、すつと越えて見渡すと、あれ、あの笠縫島の蔭へ、潛ぎ隠れて行くワイ、棚無しの小舟がとなり。

(評)作者は、萬葉に據るに、高市連黒人なり。この人、また、住吉にて、住の江のえな津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆいづる舟人

と詠めり。同時の作ならむ。舟の出入の差こそあれ、畢竟同趣向なり。但、笠縫の棚なし小舟、詩境、や、面白さか。鼻のつかへたるやうなる山路を越え來れば、俄に、眼界豁然として、開展せられたる一幅の活畫圖、萬頃の蒼波、幾處の翠村、歴々指點しつべし。かくて、この棚無し小舟も、幸に、詩人の一顧を得るに至れる、景致想ふべし。

神あそびのうた

とり物のうた

かみがさのみむろの山の榊葉は神のみまへに茂りあひにけり

(釋)神あそび 神慮を慰むる爲に、神祭の時に奏する舞樂の遊をいふ。即ち、神樂なり。○とり物 神祭の時、舞ひはやすとて、手に採り持つ物なり。神、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、杓、葛の九種あり。この採物に就きて、一々、論ひはやす歌章あり。これより以下の歌どもこれなり。○みむろ 橘守部いはく、又、みもろともいふ、御杜の義なり、神籬を、ヒモロギと訓めるも同じといへり。面白考とは見ゆれど、姑く、舊説の如く、御室と解きて、神の社殿のこととす。御室の山は、即ち、社殿のある山の意。いづこの社地の山にてもいはるべし。飛鳥の神岳、又は、三輪山を、御諸山とさしていへるとは同じからず。○榊葉 榊は、和名抄に、龍眼木を訓み、新撰字鏡には、その外、杜を訓みたり。眞淵は、榮樹の意なれば、何にまれ、常磐木の稱にて、特に、榊をいへるならむといへり。荒木田久老は、榊かといひ、田中道麻呂は、北國にて、ミシヤ〜

(九五九)

キ、ピサゴ、濃尾附近にてチサカキ、ピサカキ、シラシヤケと稱ふる物といひ、宣長も、これを贊けて、伊勢にて、ミサカキといへるに同じ、和名抄に「於、比左加木」とある物なりといひ、本居太平は、今いふ榊の木なるべしといへり。但、字鏡に、杜を、佐加木と訓めるにつきて思ふに、神社に、神木とて齊けるは、多く常磐木なり。されば、字義は、真淵の説従ふべく、しかも、榊のみ定めたるはわろし。

一首の意は、神のまします御社の山の榊は、かうして、手に執るによつて、たゞちに、神の御前に茂り合うたワイとなり。

初句、六帖に、神垣やとあり。

○

霜やたびおけど枯れせぬ榊葉のたち榮ゆべき神のきねはも

(釋) ○やたび 八度なり。數多きことに、八を換へていへるなり。○神のきね 神樂歌秘抄に、かむなぎとあり。ねぎは、真淵は、願女の轉なりといひたれど、藤部の轉ならむと、守部のいへるは、巫現を通じたる説なれば、事ひろし。さて、神樂には、八處女として、八人の巫女相具せり。宣長が、木根ならむといひ、太平が、城根ならむといへるなど、皆非なり。一首の意は、霜が、幾たび置いても枯れぬ榊葉のやうに、行末立ち榮えさうなる巫女であるはまゝとなり。

(評) 八處女の、いとうるはしきが立舞ふを見て、なりいでむ行末を思ひやれるにて、御前の榊をり用ゐて、序としたり。かくいへば、おのづから、いつける神を祝ぐ方にもなりぬべし。以上首は、榊をとりて歌ふなり。結句、六帖に、神のきねかなとなり。

○

まさもくのあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ

(釋) ○まさもくのあなしの山 まさもくは、卷向の轉。卷向山は、大和國式上郡にあり。大和志に「峰を、弓月嶽といひ、南を、檜原山、北を、穴師山といふ」とあり。○がに かのやうにと譯す。がねの轉音。○山人 山住の人をいふ。太平が、西山記、北山抄、江次第などに、神事の時、衛士を以て、山人と爲して、事を執ること見えたり、このものも、それなるべしといへるは、非なり。○山かづら 山住の人、日蔭(女羅)を頭飾とすることあり。萬葉に「足曳の山下日影かづらける」足曳の山藪の兒、「足曳の山藪かけ」の類、これなり。神事に従ふ者も、女羅を、冠などにかけてたりき。又、組絲にしてかくるにも、日蔭の名あり。紀記、天岩戸の段には、眞橋を巖として日蔭を手楯とすと見えたり。そのうつれるならむ。一首の意は、神事を勤むる人達よ、あれは、卷向の穴師の山の山人であると、よその人も見るほどに、山藪をじたかよいとなり。

(評)山藜を、さばかり勸むるは、即ち、神事をいそしめといへる諷意なり。まき向のあなしの山と
續けたるに、山深き地の趣を見せ、さるところの山賤の風俗を思ひ寄せて、山人と見るかにはい
へり。この誇張と、かの諷意と、山及び人といふ語を反復したる、疊音の諧調と相俟ちて、一種
の詩味のうごくを覺ゆ。さて、これは、神樂の葛の歌なり。

初句、神樂譜に、わぎもこが、四句、同音に、人もしるべく、六帖に、人も見るがねとあり。

み山には霞ふるらし外山なるまさきのかづら色付きにけり

(釋)○外山 奥山にむかへて、端なる山をいふ。○正木の葛 二説あり。□は、葛(ハハ)といふものに
て、本草綱目に、四時凋まず、厚葉堅強なるものにて、花さかすして、實なるとある物なるべし
といひ、□は、其の葉は、南天に似たるものにて黒みあり、冬のはじめに、古葉の紅葉し、美し
きものなりといへり。こゝに「正木のかづら色つきにけり」などあるによれば、常盤木にはあら
ず。後説を可とすべし。されば、名義も、常に、綠色なるものなれば、眞幸の意ならむといへる
説は立たず。眞橋に析きて、物に用ゐるよりの名ならむ。正木の借字なることは、論なし。
一首の意は、奥山には、もう、霞が降るらしいワイ、なせなれば、この外山にある正木の葛が色
づいたワイとなり。

(評)體製は、外山の葛に、深山の霞の排對なり。かく、外山に對へたるから、深山も、その本義よ
づいたワイとなり。

り轉りて、奥山の意と聞き做さるゝは、自然のことなり。時雨ともいはで、霞を取出でたる、殊
に、すさまじき山中の景氣を點出するに由あり。但、これはかりの想像は、奇とするに足らざれ
ども、氣韻天成にして、詞に、些の塵垢なく、及び難き高調なり。さて、神樂には、上のおなじ
く、葛に歌ふ。蓋し、日蔭と眞橋と並べ歌へるなり。又、庭燎の時に、これを歌へり。紅葉の
色を、燎の色によそへてならむ。

陸奥のあだちの眞弓わがひかば末さへよりこゑのびくに

(釋)○あだちの眞弓 あだちは、今の岩代國安達郡なり。延喜六年までは、安積郡の一部にて、安
達郡なりき。こゝより、良弓を貢せしならむ。萬葉には、あたゝら眞弓と詠めり。よりに思ふに、
あたゝらの約りたるあたりに、安達の字をあてたるか、達の字は、タルとよめば、タラにも通へ
り。さらば、あたらの眞弓なるべし。近藤芳樹は、安達太郎山と安達の原とは、所在懸隔したれ
ば、一つにすべきにあらず、安達の眞弓は、安達太郎眞弓の唱へひがめなりといへり。○末さへ
よりこゑよりこゑは、寄來なり。弓を引けば、本末、わが方へ寄るものなれば、寄せたり。

一首の意は、あの陸奥の安達の眞弓をひけば、本末が、こちへ寄つて來るが、そのやうに、かの
思ふ人も、自分の引くまゝに、末さへかけて、靡いて寄れよ、人目に立たぬやうにサとなり。
(評)初二句は序なり。端を借りて、纏綿たる情思をつくす。曲折味あり。疎句を以て結束したるは、

この、卑俗に陥らざる所以なり。さて、神樂には、弓の歌なり。
二句、神樂譜天治本に、あづさの真弓、四句、同譜に、やうく、神樂歌秘抄には、やうやくとあり。

(九六四)

わが門の板井のしみづ里遠み人し汲まねばみくさ生ひにけり

(釋)○板井 板を、井筒としたる井。○みくさ 水草なり。こゝには、の漚の類をいへり。

一首の意は、自分の門口の板井の清水は、里ばなれであるが故に、人が汲まぬによつて、あゝ、水草が生えたワイとなり。

(評)眼前景致口頭語、平々叙し去りて、何となく、風趣あるを覺ゆ。神樂には、杵の歌なり。水を汲む器なればなるべし。

初句、六帖に、わが宿の、結句、神樂譜に、水さびにけり、同一本に、みさびるにけりとあり。

ひるめの歌

さゝのくま檜のくま川に駒とめてゑばし水かへ影をだに見む

(釋)ひるめ 天照大神を、紀に「大日靈貴」と申すこと見えたり。ひるめとのみにては、餘に禮なし。されど、神樂譜にも、晝目歌の題目あれば、譜のまゝにかけるものなるべし。藤原教長が、

大嘗會の米籬女の歌なりといへるは、非なり。○さゝのくま 解し難し。この歌、萬葉に、

左檜の隈檜の隈川に馬とめて馬に水かへわれよそに見む(卷十二)

とあるを歌ひかへたるなり。左檜の隈の左は、接頭的美稱、檜の隈川は、大和國高市郡檜隈郷の流なり。

一首の意は、あの檜の隈川に、駒をとめて、しばし、その駒に、水をお飼ひなされ、さらば、その間もせめて、貴方の後姿をなりとも見ようワイとなり。

(評)初二句、檜の隈を折返して歌へるなるを、辭様の古體なるより、後人、その意を察し得ずして、下なる檜の隈に對して、篠の隈と思ひ誤れるならむ。既に、源語、葵の卷にも、「さゝの隈とも云々」といせり。結句を、景樹が、聞えずといへるは、おのれのエ聞かぬなり。影を、水に映れる影と思ひしにや。こは、その後手の影なり。混すべからず。後朝の空しめやかに、袂を分てば、駒に扶け乗せられつゝ、遠ざかり行く人の後影、歩一歩よりも小ならむとす。惜しや、名残を、しや、行手に流るゝ檜の隈の檜の隈川、人もし、心あらば、そこに、しばしだに、駒に水飼ひて、御姿を見しめ給へと詠へつけたる、痴意、熱情、實にいちらしさに堪へざるものあるにあらずや。心なき木佛も、必ず、首を回しつべし。况や、かの、心ある人においてをや。さて、この歌、必ず、大日靈神の御祀に歌ひしならば、影をだに見むを、大神の御影をだに見べく希へる意に擬へたるならむ。

かへしもの歌

(九六五)

青柳をかた糸によりてうぐひすの縫ふてふ笠はうめの花笠

(九六六)

(釋)かへしもの 催馬樂に、呂の律になるを、反聲カヘリコトといふ。まづ、はじめに「眞金よく吉備の中山」などの呂歌をうたひて、その後、律にかへして、この青柳の歌をうたふが故に、この稱あり。以下、催馬樂の歌章なり。○うめの花笠 梅の花を、笠に譬へていへり。一首の意は、青柳の糸を、片糸に縫つて、それで、笠が縫ふといふ笠は、どのやうなる笠かと思へば、梅の花笠であるはずとなり。

(評)柳の條を、糸に譬ふことは、常套なり。そを、片糸に縫るといへるは、風に片靡きする状を思へるなめり。笠の縫ふとは、今も、彼方此方と、筋違はしてあるくを、縫ひて行くといふに同じく、笠の、枝より枝に、木傳ひあるくをいふ。その縫ふといふ語の聯想に、笠は縫ふ物なれば、柳の糸して、梅の花笠を縫ふと巧みなしたり。梅の花笠は、既に、華美なる笠、或は、花を飾れる笠を、花笠といふ成語あるより、それに、梅のと冠らせたること、「松の緑子」の類にて、作者の造語なり。梅柳に、笠をあへしらひ、しかも、この笠縫の妙趣向さへあれば、すべて、花やかに、面白し。されど、てふの語、猶妥貼ならず。この歌よりも以前に、笠の縫ふといへる古歌ありけるにや。はた又、もと、縫ふなる笠はなどありけるを、催馬樂に歌ふにつきて、調子にまかせて、てふと歌ひかへたるか。さる類例多ければ、かくも疑はるゝなり。

まがねふく吉備の中山帯にせるほそたに川のおとのさやけさ

この歌は、承和の御へのまぎの國のうた。

(釋)○まがねふく かねは、廣く金屬をさしていふ。まは、例の美稱。これを、舊註は、鏡なりといひ、契沖は、黄金なりといへど、當らず。ふくは、鞆フイにて、鑊物を吹くをいふ。こは、吉備の枕詞に用ゐたり。吉備の國に、昔、産鑛の山ありしならむ。○吉備の中山 吉備は三備の總稱なれど、中山は、備中國吉備郡眞金村にあり。方角抄に、「備前備中の國境なり、吉備津の宮あり。山は、さして高からず、松むらゝあり。今、細谷川といふ水も、この山の腰なりとあり」。○ほそたに川 細き谷川なり。川の名とするはうつれるなり。木下長嘯の九州紀行に、「細谷川のほとりに至りて、その水上にのぼりて見れば、小き池の中より、たえなくいづる清水なりけり。水無月の頃にも絶ゆることなしとなむいへる。その谷川の廣さ、筆筭の長さばかりありけり」とあるは、しひて設けたる名なり。○左注にいへる承和は、仁明帝の年號。御へは、大嘗を略きたるなり。續日本紀に、この御代の天長十年十一月の大嘗會に、主基の國備中、悠紀は近江とあり。その度の歌なるべし。

一首の意は、この吉備の中山が、山の腰に帯にして居る一筋の紐と見ゆる、細谷川の水の音のさはやかさとなり。

(評)萬葉集卷七、

(九六七)

おほ君の三笠の山の帯にせる細谷川のおとのさやけさ
の初二句をかへて、大嘗會の主基の歌とせしならむ。眼目は、帯にせるの一句にあり。山の腰といふよりの聯想なり。昔の帯は、その幅狭くして、殆ど、紐の如き物なれば、細谷川をば、帯と見むに殊に由あるが如し。

みまさかや久米のさら山さらくにわが名はたてじ萬代までに

これは、水のをの御への美作國のうた。

(釋)○みまさかや やは連辭。○久米のさら山 美作國久米郡佐良山村。もとの久米南條郡佐良莊にある山なり。○さらくに 新にといはむが如し。今の俗にいふとは、意かはれり。○左註の水のをは、清和帝の御號。三代實錄に「貞觀元年十一月大嘗會、悠記三河國、主基美作國」とある時のなり。

一首の意は、美作の久米の皿山の名のやうに、今更に、自分の戀するといふ名は立てまいぞ、それは、何時までもサとなり。

(評) こも、古く、さる歌のありしを用ゐられしならむ。さらば、初二句の序の如きは、或は、折にかなふべく、歌ひかへられけむもはかり難し。四句までは、戀歌のやうにて、結句、はた、殊なる趣あり。四句、催馬樂に、わが名はたえじとあり。これは、わが名を、萬代までもいひ繼が

むの意なれば、打合ひたり。まかし、もとは戀歌なるべし。

みののくに關のふぢ川たえずして君につかへむ萬代までに

これは、元慶の御へのみののうた

(釋)○關のふぢ川 美濃國不破郡、不破の關を流る、藤川なり。今、藤子川といふ。小島の口遊に「關の藤川は、その名もなつかしければ、言問ひ侍りし。名はことごとくしけれど、さしもなき小川にて、萬代までの流ともわかれず。されど、たえぬためしは、いと頼もしくて云々」。○左註の元慶は、陽成帝の年號。三代實錄に「元慶元年十一月大嘗會、悠記美濃國席田郡。主基備中國都宇郡」と見えたり。

一首の意は、美濃の國の關の藤川の流の絶えずしてあるやうに、我等も、君に仕へ奉らうワイ、萬年までもサとなり。

(評)この御時は席田郡なり。然るに、不破郡の關の藤川を詠めり。眞淵が、これを訝りて、席田郡にも、關の藤川あるかといへるは、一わたり、さる事なり。但、地理的思想の缺乏せる時代の歌人なれば、或は詠み過ちならむも測られざるを、猶思へば、これは、大らかに、美濃の國の歌として詠めるならむ。餘に細かにことわるは、作者の本意に背きぬべし。下句、古調なり、上句は作りかへしものか。

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの敷はよみつくすとも

これは、仁和の御へのいせのくにのうた。

(釋)○長濱 伊勢國員辨郡。○よみ 敷をよむは、即ち敷ふることなり。○左註は、三代實錄に、光孝帝の大嘗會に、「元慶八年十一月、悠紀伊勢國員辨郡、主基備前國和氣郡」と見えたり。一首の意は、君の御代は、何時までといふ限もあるまい、名さへ長濱といふ、この濱の真砂の敷は、たとひ敷へつくすといふともサとなり。

(評)序文にひける「わが戀はよむともつきじありそみの」とある歌の下句、これに同じ。又、賀、「わたつ海の濱の真砂を敷へつ」と、著想を同じうす。蓋し、彼より奪胎したるならむ。詞もうるはしく、聲調も滑かとなれり。たゞ、その格調の、漸く卑きは、やむを得ず。猶、賀「わたつ海の」の條にいへる評を参照せよ。又、續後拾遺集に、仁和の御時の大嘗會の悠記方伊勢國風俗歌「伊勢の海の濱を清み云々」の作者を、大伴黒主とあるより、契沖は、これをも、黒主の歌と定めたり。まことに、かくよみかへて、謠物とせしは、黒主ならむも測り難し。

おほとものくろぬし

あふみのや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千年は

これは、今上の御へのあふみの歌。

(釋)○あふみのや やは嘆辭。○左註の今上は醍醐帝。その大嘗會は、寛平九年十一月。この頃は、悠記には、近江の國を用ゐらるゝ例となれり。

一首の意は、近江の國にまゐ、鏡山といふ山が立ててあるによつて、前以てサ、よく見ゆるワイ君が御代の千年で御座ることとはとなり。

(評)鏡によれる著想は、雜上、

鏡山いざたちよりて見て行かむ年へぬる身はおいやしぬると同じくて、これは、やゝ、鏡を重く取なして、山をたてたりと具象的にいへる、面白し。調さやかにして、細流の、瀬に鳴るが如し。作者は、近江の國人にして、歌詠むといはれたる人なれば、この風俗歌仕うまつれるか。さて、上なる御への歌ども、作者の名を署せざるに、これひとり、あるは、全く、當代の事にして、作者もたしかなればなり。上なるは、皆、古歌を取繕ひたるものと見ゆれば、作者と名づくべき作者なきなり。

東歌

みちのくうた

あぶ隈に霧たち渡り明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

(釋)東歌 東國の歌なればいへり。これも、謠物に用ゐられしなり。○あぶ隈 あぶくま川なり。

阿武隈、阿福麻、逢隈の字をあつ。源を、磐城に發し、岩代を横流して、陸前の亘理郡に至りて、海に入る。

一首の意は、阿武隈川に、霧が立つて、夜が明けたりとも、思ふ人をばやるまいぞ、やつてしまふて、又、来るまでを待てば、その間が、何とも、仕方がないワイとなり。

(評)二句は、たち渡れなるべきか。さらば、霧立ちて、明けぬる夜もわかれずあれかしの意なり。起き別れゆく人をとよめむすべなきに、思ひ煩ひたるに、端なく、宿近き、さる大河の、水波高くて、常に霧り易きに想ひ到りて、その霧よ立渡れと命令したるは、既に、常識を超越したるものにて、君をばやらじと思へる熱情の高度に達せるを見る。下句の、層々いひ下せるは、節奏の上よりしても面白きに、まてばすべなしの單句、實に、千鈞の筆力あり。爲に、全首無窮の情味の涌くを覺ゆ。かの龍尾、一たび掉へば、鱗甲、悉く堅つといへるものに庶幾し。さて、四五の句イ韻を踏みて排對したるは、聲調の諧へるのみならず、その響凄涼にして、沈痛の感を助長するに適せり。定家の密勘に、東歌を評して、「凡此部歌、與日月懸、與鬼神爭、與非短慮所及」といへるは、彼、一隻眼を有すといふべし。

二句、今本に、たちくもりあり。本文は、一本のに従へり。四句、六帖に、せなをばやらじとあり。東歌としては、東國の俗語なるせなを用むむぞかなふべき。勢語にも、陸奥の女の、せなと詠める歌見えたり。

みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも

(釋)〇いづく 六帖に、いづくことあるをよしとす。誤寫ならむ。〇綱手かなしも 綱手は、こ

は、曳舟の綱をいへり。かなしは、面白しと感歎せらる意にて、悲しにはあらず。もは歎辭。

一首の意は、奥州は、どこにも、面白い所があるけれど、別して、この鹽竈の浦を漕ぐ舟の綱手を曳いてゆく景色が、面白いことであるはまあとなり。

(評)思ひやれば、誠に面白き景色なり。然れども、その詩境の内容の叙寫を怠りて、輪廓をのみ擧げたるは、慚らず。

四句、六帖に、離が島のとあるはわるし。

わがせこを都にやりてゑほがまの離が島のまつぞこひしき

(釋)〇都に 都へとあるべきなり。古歌の例、皆然り。〇離が島 鹽竈の浦にあり。〇まつ 松に、

待つをかく。

一首の意は、わが夫を、都へ出しやつて、何時戻らるることかと、鹽竈の浦の離が島の松といふ名の、待つて居ることがサ、さても戀しいことであるワイとなり。

(評)陸奥女の閨愁をのべたるものなり。三四の句は、待つといはむ序ながら、都との對照ありて、一別千里、兩地、空しく相思ふの趣も見ゆめり。惜しいかな、戀しきといへるは露骨なり。され

は、同想の同型なる萬葉卷十四、
わがせこをやまとへやりて鬮刺足柄山の杉の木のみか
に逐ること遠し、島の松の影技如きは、何かあらむ。
結句、六帖に、まづは苦しもとあり。

○

をぐる崎みつのこじまの人ならば都の苞にいざといはましを

(釋)○をぐる崎 いづれ、磐城、岩代以北の地ならむも、所在未詳。○みつのこじま 三つの小島なり。

一首の意は、あの小黒崎にある三つの小島が、人であるならば、京へのみやげに、さあ来いとい
うて連れうものを、人でない故、それもならぬが、残念であるワイとなり。

(評)この面白き景色を、こゝに遺し置かむは惜しきことかなの餘意あり。この餘意を、諸注、都人
に見せたとまで解けるは、いひ過ぎたり。小黒崎三つの小島、いかにをかしき處ならむ。島を、土
産にせむの著想、何ぞ詩的なる。人ならば、分別に住する嫌あれど、人ならぬ故、いざとい
ひ難き意を反襯して、苞にえせぬを憾み惜める歎意を深からしむ。さては、主眼の句にて、一首
の性命は、全く、こゝに係れりといふべし。作者は、京人なり。伊勢物語に、
栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

は、これをかへて、例の作話の料としたるなめり。

○

みさぶらひ御笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり

(釋)○みさぶらひ 御侍なり。貴人の侍臣をいへり。句の意は、御侍よの意。○御笠とまをせ 御笠
を召し給へと申せの意。

一首の意は、御家來衆よ、それお笠と申し上げられい、この宮城野の樹蔭の露は滋くて、雨より
もきつう御座るワイとなり。

(評)げにや、宮城野は、西のはづれ岡山にして、今も、木茂き昔の俤を殘せり。いにしへの木の下露、
いかに滋かりけむ。鄙には珍しき狩衣姿の貴人、指貫のそばとり給ふもたゆげに、野を分けわび
させ給へるに、御笠もち、御馬曳きつれたる侍共、萩の露ふみしたきつゝ出で來るは、宛たる一
幅の畫圖ならずや。露の、雨にまされりといふは、既に誇張なるを、更に、御笠を取出でて、そ
を實にしたるは、空中樓閣に、金碧を敷成するものなり。この妙不可思議力、何人か魅せられざ
るものあらむ。初二三句に、みの頭韻を戴けるは、故意か、無心かは知らねど、聲調の諧ふこと
は事實なり。

○

もがみ川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり

(九七六)

(釋)〇もがみ川 羽前の大河にして、最上郡に入りて、最上川の名あり。下流は、酒田の港に注ぎて、酒田川と呼ぶ。〇稲舟 刈稻積みたる舟にぞ、こは、正税を國衙に運ぶものなり。いにしへは、稻何束といひて、穂付のまゝに、正税を納めしなり。〇いな 否なり。

一首の意は、最上川をのぼるもあれば、くだるもある稲舟の名のやうに、否といふではない、しかし、この月中だけは、障があつて、逢はれませぬワイとなり。

(評)最上川は、日本三急流の一と聞えたり。さる河上を、秋冬の交、正税の稲舟、追ひすがひ、上りくだるさま思ひやるべし。さて、そを序としたり。急流なれば、上れば、忽ちくだるの意と見むも由なきにあらねど、事狭くして、をかしからず。さて、この序は、いなにはあらずの意を、強く表示し得て、相手の心を取るに、いと力あり。かく、一度、肯諾の意を洩し置きて、さて、本題に入りて、この月ばかりは否と表裏せる、紆餘曲折の妙、言語に絶せり。結句の造語も簡淨なり。尙思ふに、この月は、婦人の月事を、下に含めたるか。さらば、この障を過してのち逢はむの意なるべし。こは、試にいふのみ。又、全首、語調の、いたく促迫せるを見よ。音數の排列を案するに、

初句(三三)二句(四三)三句(四一)四句(四三)五句(四三)

とやうの組織にして、句々、促調ならざるはなし。珍しといふべし。この急き込みたる調子は、

男に、さらばなど怨みられて、あわてて辨疏したる趣に聞きなざるめり。

君をおきてあだし心をわがもたばするの松山波もこえなむ

(釋)〇あだし心 空々しき心なり。〇するの松山 冬「浦近くふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見る」の條に、委しくいへり。さて、猶思ふに、陸前國桃生郡に、須江といふ山村あり、海岸を距ること一里半ばかりなり。はやく、陶物造りの居りける所にて、もとは、するといひけるを、いつか、假名の違ひけるならむ。果して、そこならば、波をいはむにも、由ありて覺ゆ。一首の意は、貴方をさしおいて、他心を、私が持つたら、このするの松山を、浪も越ゆるであらうワイとなり。

(評)さる事あるべくもなければ、わが仇し心持つこともなしと思への餘意あり。波もは、人の越ゆるに對へたり。すべて、盟誓には、常住固定なる事物を提擧して、不渝不變の意を立證すること常なり。日本紀に、新羅人の誓に「東の日、西に入り、あれなれ川の、さかさまに流るゝ時まで渝らじ」といへるも同じ。貞潔の語、すでに、情の美に禁へざるに、加ふるに、波もこえなむの婉語を以てす。蓋し絶唱なり。

さがみうた

(九七七)

小よろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波

(釋)○小よろぎの磯、雜上「玉だれの小瓶やいづら」の條にいでたり。○たちならし、踏み平すこと。○磯菜、磯つきの海藻をすていふ。○めざし、髪を、切禿にしたる兒女の稱。髪短くて目を刺すほどなるよりいへり。籠の名とするは非なり。○をれ、居れと命するなり。折れにはあらす。一説所々「例」「例」「「例」「「例」」

一首の意は、小湊の磯に出て、あちこちあるいて、磯菜を摘む、あの子供を濡らすな、これ浪よ、さう、磯へ立つて来ずに、沖の方に居れとなり。

ひたちうた

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御かげにますかげはなし

(釋)○筑波根、雜下「つくばねの木の下毎に立ちぞよる」の條にいでたり。○このもかのも、此面彼面なり。○御かげ、御惠の蔭なり。俗にいふ「オカゲ」に同じ。

一首の意は、筑波山のこなたおもてにも、あなたおもてにも、木の蔭は、おひたしくあれども、お惠のあつい君のお蔭にまさる蔭はないワイとなり。

(評)筑波山は、關東の平野に特立して、四方より、その山容を仰ぎ得べきこと、猶、芙蓉峰の、八面玲瓏なるが如し。されば、かれには、彼方おもて、此方おもてをいひ、これには、このもかのもをいへり。景樹が、女神、男神とて、同じさまなる高根の立並びたれば、このもかのもといへりと解けるは、この實境を知らざる説のみ。また、この山、奈良時代には、鶯さへかよなきたりし程にて、今も、樹木鬱蒼たる所なれば、蔭をいへるなり。さて、君の御蔭より、筑波の樹蔭を聯想し得て、この同音異意義の二語を、全然混同して、比較したる没理趣が、詩味の素を成せるなり。ます蔭はなしの斷案を下すに至りて、いよく詩的なり。このもかもの疊音、かげの語の三疊は、いよく諧調となりて、聲響、うたゝ佳なり。

筑波根の峰のもみぢ葉おち積りふるもゑらぬもなべてかなし

(釋)一首の意は、この筑波嶺の紅葉が、麓に落ち積つたのが、面白くてをしまるゝやうに、誰彼なしに、悉く親しう愛せらるゝはまゑとなり。

(評)上句は、かなしもへ係る序といへる、宣長の説従ふべし。但、この歌のみにては、事相漠然た

れば、評せず。

かひうた

かひがねをさやにも見しがけられなく横ぼりふせるさやの中

山

(釋)かひがね 甲斐が嶺なり。○さやに 鮮かにの意。○が 願望の辭。○けられ ころの轉。東國の方言なり。金槐集に、けられ木とよみ、甲斐人は、今も、九日ヶ、ヌカといへり。○横ぼりふせる 横たはり臥せるの意。○さやの中山 今、さよの中山といふ。遠江國小笠郡、日坂時と金谷時との間、もとの佐益郡のなからにありければ、この名あり。

一首の意は、故郷の甲斐が嶺をば、ありくと、あざやかに見たいワイ、それに、心もなう、あのやうに横たはり臥して、目前をふさいで居る佐夜の中山であることよとなり。

(評)都にのぼる甲斐人の、遠江まで来て、故郷の方を顧みしけるか、はた、都より歸れる甲斐人の、こゝまで来て、故郷を望めるか、そはいづれにもありぬべし。空谷の登音、わづかに、一片の山、影を望みても、この望郷の歎を憐するに足るは、蓋し人情なり。さるを、佐夜の中山横ぼり臥して、恰も、塙に面して立てるが如し。頑たるかなや、佐夜の中山。けられなしといはざるべけむや、佐夜の中山。又、こゝに、甲斐が嶺といへるは、富士のねをさせるか。甲斐に、高き山多けれど、富士にまさる山もあらし。故郷にて見馴れしまゝに、打任せて、甲斐がねといはむもつきな

からず。

四句、顯註に、一本、横ぼりくせる、又、一本、こせるとある由見えたり。ともに、ふせるの詛なるべし。心を、けられといへる類の甲斐の方言と思ゆれば、もとは、さもありけむかし。

甲斐がねをねこし山こしふく風を人にもがもや言づてやらむ

(釋)○ねこし 嶺越しなり。○人にもがもや がもは願望の辭。やは嘆辭。

一首の意は、峰をも越し、山をも越して、甲斐が嶺を吹いてゆく風を、どうぞ、人にしたいもたワイ、さらば、都へ、言傳をしてやらうにとなり。

(評)京より下り居る地方官吏などの詠めるか。日夜、郷愁に禁へざるに、問ひやらむ便さへなくて、わび居る時、たましく、山風の、重疊せる峰巒を吹き平しつゝゆくを見て、風の便を思ひ寄り、人にもがもやと歌へるなり。この句の眼目なる事は、上なる「小黒崎三つの小鳥の人ならば」の歌と同じ。そこにいへるを参看すべし。二句、つぎつぎに吹き渡る山越の風を形容して、その妙を悉せり。しかも、下に、旅ゆく人の、ねこし山こしするに由ありて、おのづから、人にもがもやの襯染となり、四句唐突ならず。想を遣ること細やかなりといふべし。かくて、聲調もをかしきなり。「三つの小鳥」と、同工異曲なる中に、彼は、一時の逸興、これは、永久なる沈痛の響なれば、情味の長き點においては、彼及かず。その疎宕にして、人願を解くは、これ及ばず。

いせうた
をふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならずも寝て語
らはむ

(釋)〇をふの浦 所在たしかならず。顯註に、「志摩の國にあり。齋宮の御庄にて、梨を献する所なり。伊勢志摩といひて、一つによめり」とあるに、姑く従ふ。〇なりもならずも 成否の意にて、嫁娶の定るをなるといふ。

一首の意は、麻生の浦に、片枝さし覆うてなる梨があるが、その梨のなるといふやうに、其方と自分も、表向の相談のなるならざるはともかくもまあ、何であらうと、一所に寝て、話をせうつイとなり。

(評)詞づかびはおもしろし。老練のしわざなり。

冬の加茂のまつりのうた

藤原敏行朝臣

ちはやぶる加茂のやしろの姫小松よろづ代ふとも色は變らじ

(釋)冬の加茂の云々 加茂は、四月を例祭とす。然るに、十一月の臨時の祭を始め給ひしは、寛元年にして、左近中将藤原時平朝臣を御使として、藤原敏行に、東遊の歌を詠ましめ給ひし事、寛平の御記に見えたり。大鏡にも、これにつきたる傳説を載せたり。下の末の日試樂、下の西

の日、この祭あり。

一首の意は、この御神威のはげしい加茂の社の御前の姫小松は、このうへ、萬代を経るといふとも、色は變りはすまいツイとなり。

(評)かくの如き神徳にて護らせ給ふ君の御うへは、申すまでもなしの餘意あり。眞淵いふ、歌は、いさゝかも隠れたる事なく、且滞りたる所なく、詞は、まどかなる玉を見るが如し、この巻の終に置かるべき歌なり。そのうへ、今上の御父帝の、神の御告にて始め給へる祭の歌にて、限なき御よろこびの事なれば、この巻のとちめにせらるゝなりといへる、適評なり。

二句、顯本、かもの祭のとあり。

家々稱證本之本作書入以墨滅歌今別書之

これは、卷々の中に、左の歌ども、家々に藏する證據とすべき善本に書き入れられながら、墨もて滅してありしなり。それを、定家卿、校定本を作る時に抜き出して、こゝに書き集めたりといふなり。畢竟、證本といふとも、猶、區々の誤ども多かりしならむ。まことに滅すべきも見え、滅すまじきも見えたり。「わざもこにあふ坂山のしのすゝき」、及び、以下の歌どもは、必ず除くべきものぞ。

卷第十 物名部

ひぐらし

つらゆき

柚人は宮木ひぐらしあしひきの山のやまびこよびとよむなり

在_三郭公_下空蟬_上

(釋)○柚人 材木を樵る山を柚山といひ、樵る人を柚人といふ。○宮木 大宮を造るに用る木材なり。○この歌は、本集中の或者に優ること數等。この人の作中にも、屈指すべきものの一つなり。

勝 臣

(九八五)

(九八六)

かけりても何をかたまのきても見むからは焔となりにし物を

をかたまの木 友則下

(釋)○たま 魂なり○から 亡骸なり

くれのおも

つらゆき

こし時とこひつゝをれば夕ぐれのおも影にのみ見え渡るかな

忍草 利貞下

(釋)くれのおも 和名抄に、「懷香、一名懷芸、和名、久禮乃於毛」とあり。○こし時 思ふ人の來し時なり。

おきのゐ みやこじま

をののこまぢ

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこまへの別なりけ

り

からこと 清行下

(釋)おきのゐ○みやこじま 所在不明。伊勢語に、「昔、みちのくにて云々、おきのゐみやこじまといふ所にて」と書きて、この歌あり。かくては、一ところのやうに聞ゆ。物名に、かくよむから

は、異どころならむ。陸奥といへるも、覺束なし。○おきのゐて 熾火の著さむてなり。○みやこじま 都と島邊との意。

そめどの あはだ

あやもち

うさめをばよそめとのみぞ遁れゆく雲のあはだつ山の麓に

此歌は、水のをのみかどの、そめどのより、あはだへうづりたまうける時によめる。

桂宮の下

(釋)そめどの 染殿は、拾芥抄に、「正親町北、京極西二町」とあり。忠仁公藤原良房の家なりしを、清和帝、外宮とせられて、貞観十八年に行幸ありき。○あはだ 京都の三條より、逢阪山の方へいづる所にて、粟田山あり。○あはだつ 淡々しく浮き立つこと、○左註は、三代實錄、元慶三年五月四日の條に、太上天皇、清和院より、粟田院へ移り給ふこと見えたり。太上天皇は清和帝、清和院は、染殿とおなじとぞ。

卷第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪の下

けふ人をこふるこゝろは大井川ながるゝ水におとらざりけり

(釋)三四の句、宗干集に、飛鳥川流るゝみをれとあり。

(九八七)

わぎもここにあふ坂山の志の薄ほにはいでもこひわたるかな
(九八八)

(釋)〇わぎもここにあふ坂山 逢ふに、相坂をかく。上句は序。萬葉集十一、
わぎも子に相坂山のしのすゝき穂には咲き出す戀ひ渡るかも
をよみ誤れるものなり。

卷第十三

こひしくば下にを思へ紫の下

犬がみのとこの山なるいさや川いさと答へよわが名もらすな

此歌は、ある人、あめのみかど、淡海の采女にたまへると。

(釋)〇犬かみのとこの山 近江國犬上郡。〇いさや川 犬上川のこと。〇いさ 不知なり。〇左注
あめのみかどは、天智帝を申す。

上句は序にて、もし、人が問はば、いさ知らすと答へよ、わが名を知らすなの意なり。萬葉集十
一、詠者不詳、

狗上の鳥籠の山なるいさや河いさとをきこせわが名のらすな
の訓みたがへなるが、意は違はず。左注は、據なき説なり。

かへし

うねべの奉れる

山しなの音羽の瀧のおとにだに人のあるべくわが戀ひめやも

(釋)戀三に、「音羽の山の」とあるを、瀧とかへたるのみ。

卷第十四

思ふてふことの葉のみや秋をへての下

そとほり姫のひとりのみかどを戀ひ奉りて

わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてある
しも

(釋)そとほり姫の云々 日本紀允恭紀に、天皇、衣通姫を、藤原の宮に住ませ給ひて、たま〜行幸あ
りて、姫のおはすやうを伺ひませるを知らず、この御歌よませ給へること見えたり。但、三句以
下「さゝがねの蜘蛛のおこなひこよひしるしも」とあり。〇ふるまひ 舉動なり。さて、蜘蛛、衣など
にかゝるは、人の來る前兆ぞといふ諺ありしなるべし。この事、戀五「今しはと思ひしものをさゝ
がにの」の條にいへり。

深養父 戀しとはたが名づけけむことならむの下

貫之

(九八九)

道あらばつみにも行かむ住のえの岸におふてふ戀わすれ草

(九九〇)

(釋)〇戀わすれ草 藪草に、戀と冠せたるは、人忘草、愛さ忘草の類なり。さて、萬葉集七、いとまあらは拾ひてゆかむ住の江の岸によるとふ戀わすれ貝を、すこしかへたるのみ。貫之のまわさとも覺えず。

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無爲思慮易遷哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌和歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無分和歌未作逮于素盞鳴尊到出雲國始有三十一字之詠今反歌之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者爰及人代此風大興長歌短歌旋頭混本之類雜體非一流漸繁譬猶拂雲樹生自寸苗之煙浮天浪起於一滴之露至如難波津之什獻 天皇富緒川之篇報太子或事關神異或

(九九一)

興入幽玄，但見上古之歌多存古質之語，未爲耳目之翫，徒爲教戒之端。古天子每良辰美景，詔待臣預宴，筵者獻和歌，君臣之情由斯可見。賢愚之性於是相分，所以隨民之欲，擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦，詞人才子慕風繼塵，移彼漢家之字，化我日域之俗，民業一改，和歌漸衰。然猶有先師柿本大夫者，高振神妙之思，獨步古今之間。有山邊赤人者，並和歌仙也。其餘業和歌者，綿綿不絕。及彼時變澆漓，人貴奢淫，浮詞雲興，艷流泉涌，其實皆落其花，孤榮至有好色之家，以之爲花鳥之使，乞食之客，以之爲活計之媒。故半爲婦人之右，難進丈夫之前。近代存古風者，纔二三人，然長短不同，論以可辨。花山僧正尤得歌體，然其詞華而少實，如圖畫好女，徒動人情。在原中將之歌，其情有餘，其詞不足。如萎花雖少彩色，而有薰香，文琳巧

詠物，然其體近俗，如賈人之著鮮衣，宇治山僧喜撰其詞，花麗而首尾停滯，如望秋月，遇曉雲。小野小町之歌，古衣通姬之流也。然艷而無氣力，如病婦之著花粉。大友黑主之歌，古猿丸大夫之次也。頗有逸興而躄甚鄙，如田夫之息花前也。此外，氏姓流聞者，不可勝計。其大底皆以艷爲基，不知歌之趣者也。俗人爭事榮利，不用詠和歌。悲哉！雖貴兼相將，富餘金錢，而骨未腐。土中名先滅於世上，適爲後世被知者，唯和歌之人而已。何者？語近人耳，義慣神明也。昔平城天子詔侍臣，令撰萬葉集，自爾以來，時歷十代，數過百年。其後和歌棄不被採，雖風流如野宰相，輕情如在納言，而皆以他才聞，不以斯道顯。伏惟陛下御宇，于今九載，仁流秋津洲之外，惠茂筑波山之陰，淵變爲瀨，之聲寂々，閉口砂長爲巖之頌，洋々滿耳，思繼既絕之風，欲興

久廢之道、爰詔大内記紀友則、御書所預紀貫之前、甲斐少目凡河内、躬恒、右衛門府生壬生、忠峯等、各獻家集、並古來舊歌、曰續萬葉集、於是、重有詔、部類所奉之歌、勒而爲二十卷、名曰古今和歌集、臣等詞少春花之艷、名竊秋夜之長、况乎進恐時俗之嘲、退慙才藝之拙、適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌、嗟呼、人磨既沒、和歌不在斯哉、于時、延喜五年、歲次乙丑、四月十八日、臣貫之等謹序、

(上文、本朝文粹によりて是正したり)

作家列傳

本傳は、すべて、作家の氏をすて、名によつて次第したり。氏名なきものは、官名、或は、稱呼を、もとのまゝに掲げつ。而して、排列の次第は、五十音圖の順によれり。

アキミネ 秋岑

美濃守紀善峯の子。六位。

アサヤス 朝康

文屋康秀の子。延喜中、大舍人大允、大膳少進を歴任す。

アツユキ 篤行

平氏。從五位上與我王の二子。寛平五年、文章生に補せられ、大和伊勢の掾より、國司を歴任して、筑前守兼大宰少貳に至り、延喜十年正月卒す。

アツユキ 淳行

伊香子氏。傳は未詳。

アマネイコ 治子

參議春澄香繩の女。貞觀の頃、正四位下與侍たり。

アヤモチ

傳未詳。

アリスケ 有輔

御春氏。延喜中、左衛門權少志、同權少尉となる。藤原敏行の家人にて、河内の人とぞ。貫之の集に、兼輔の兵衛佐が、加茂川の邊にて、この人の、甲斐へゆく饗宴をせしこと見えたり。

アリスエ 有季

文室氏。三代實録貞觀五年三月の條に、「散位從五位上文屋有眞爲下總守」とあり。有眞は、訓アリマなるべし。さて、マの平假名、末の字の草なれば、誤りて有末と奇けるを、更に有季としたりか。

アリツネ 有常

正四位下紀名成の子。性清靜にして、儀容あり。少時、仁明帝に侍奉したりき。官從四位下周防權守にいたり、元慶元年正月卒す。年六十三。

アリトモ 有友

又有朋。紀氏。仁明、文德、清和、陽成の朝に仕へ、從五位下宮内少輔となり、元慶四年卒す。

イウセン 幽仙

右近將監藤原宗道の子。寛平七年律師となる。昌泰三年入道す。仁和寺を建立して、別當たり。もと、慈覺大師の弟子なりしにより、昌泰二年、延暦寺の別當になさる。

イセ 伊勢

伊勢守藤原藤隆が女。七條後の宮人たる時、藤原仲平に通じ、又宇多帝に寵愛せられ、寛平の末、皇子を誕すといふ。帝位を退く時、伊勢、また退きて、五條の里第に居り、敦慶親王等と通じて、女中務を生む。歌は、當代女流の第一人なり。

イナバ 因幡

因幡守基世王の女。基世王は、二品仲野親王の子なり。

イマミナ 今道

布留氏。清和、陽成、光孝、宇多の朝に歴任し、仁和元年造酒正に、昌泰元年三河介に任ぜらる。

ウツク 籠

(クラを見よ)

ウリンキンノミコ 雲林院親王

仁明帝の皇子常康親王これなり。母は紀名成の女種子。仁壽元年出家、貞觀十一年五月薨す。雲林院は、この親王、その別業をすて、運昭に付囑して、寺とせしところなれば、この號あり。

オキカゼ 興風

參議藤原清成の曾孫。院藤太と號す。延喜のはじめ治部少丞、上野大掾、下總權大掾、同十二年相模掾に任ぜらる。彈琴の師たり、管絃を能くす。

オト 乙

遠江介壬生益成の女。益成は、元慶仁和の代の人なり。

オホヨリ 大頼

三代實録。元慶元年の條に、石川朝臣箭口朝臣等奏して、先祖の蘇我氏の稱に返りて、並に宗岳朝臣を賜はること見えたり。さては、宗岳はソガと讀むべく、ムネチカとは訓むべからず。さて、大頼は算博士なり。

カゲノリノオホキミ 景式王

四品惟保親王の後なり。寛平九年、從四位下に叙せらる。

カチオン 勝臣

藤原氏。元慶七年阿波權掾に任ぜらる。

カネスケ 兼輔

右近中將藤原利基の子にして、兼茂の弟。從三位中納言に任ぜられ、承平三年二月薨す。年五十七。加茂川の堤に家居せしり、世に堤中納言と呼ばる。

カネミノオホキミ 兼覽王

仁明帝の孫、國康親正の御子。神祇伯宮内親正四位下にいたる。承平二年卒す。

カネモチ 兼茂

右近中將藤原利基の子。寛平中讃岐權掾より、藏人となり、延喜のはじめ、左衛門佐侍從、同二十三年參議左衛門督にて卒す。

カンキン 閑院

延喜頃の人にて、命婦なりとぞ。

カンキンノゴノミコ 閑院の五の皇女

嵯峨帝の妃均子内親王といへる歌しあれど、歌體を案するに、今すこし、時代下れりと覺し。傳詳ならず。

キセン 喜撰

又基泉とかく。眞言宗の僧にて、山城國乙訓郡の人とぞ。宇治山に跡を置せり。世に喜撰式(金針とも)とて、歌の疵弊をいへる書あり。偽書ならむといへり。

キノメノト 紀乳母

名は全子。嵯峨帝の孫源澄の妻にして、陽成帝の御乳母となり。元慶六年從五位上に叙せらる。

キヨキ 潔興

宮道氏。昌泰元年内舍人となり、保明太子の帶刀たり。延喜七年賀之にかはりて、越前權少掾となる。

キヨユキ 清行

大納言安倍安仁の子。承和三年、文章生に補せられ、清和帝の代左衛門權佐、陽成帝の代右中辨、光孝帝の代陸奥守、宇多帝の代從四位上讃岐守に任ぜられ、昌泰三年卒す。年七十六。

クソ

源作が女。

クニツネ 國經

權中納言藤原長良の長子。基經の兄なり。孝に、顯業を繼て、寛平年中權中納言兼大宰權帥、延喜年中大納言となり、同八年六月薨す。年八十一。

クラ 内藏

本文、寵の字を書けるは誤。傳は未詳。或は曰く、大納言源定の孫にして、大和守緒の女と。

クロメシ 黒主

大友氏。近江國滋賀郡大友郷の人にして、園城寺の地主なり。郡の大領となり、八位に叙せらる。延喜中、宇多法皇、眞、石山寺に幸す。國司、その民を勞せむことを思ふ。法皇、これを聞き、他國の奉色の費を以て幸し給ひぬ。國司、大に懼れ、卒を打出濱に造り、菊花を植ふ。獨、黒主をして侍せしむ。黒主、さくら波まなくも岸を洗ふり清濁くは君とまれか」の歌を獻す。法皇、大に喜び、物を賜ひて賞し給へり。仁和、昌泰の大嘗會の風俗歌を奉す。

ケイシン 敬信

(ケウシン)見よ。

ケウシン 敬信

藤原因香朝臣の母にて、尼となりし人。或は曰く、小野千古が

母と。

ケンゲイ 兼盛

伊勢少孫古の二子にして、大和城上郡の人と。

コトナホ 言直

藤原氏。昌泰三年、因幡權掾、内監頭に任ぜらる。

コマチ 小町

小野氏。この人にかゝれる傳説は、大抵虚妄なり。出羽の郡司の娘といへるも據なし。この集、及び、後撰集に、小町が姉小町が孫なども見ゆれば、夫も、親屬もありけるなり。又小野貞樹と詠みかはし歌あれば、これも親屬にて、近江の小野より出でたる氏ならむか。時代は、康秀、迥昭等と歌よみかはししに見れば、文徳の頃の人にて、清和の御宇までありし人にて。歌は、今の京の方に及ぶ人なし。伊勢の御も名高けれど、小町には劣りたりと、眞淵の評せるが如し。

コマチガアネ 小町姉

傳未詳。

キヨキ 清樹

橋氏。河波守にて、昌泰二年三月卒す。

コレタカノミコ 惟喬親王

文徳天皇第一の皇子、母は紀靜子。貞觀十四年七月出家、法名

(九九八)

算延。寛平九年二月薨す。比叡山の麓小野に籠りましける故に、小野宮と申し奉る。

コレモト 惟幹

藤原氏。六位陸奥掾。

コレヲカ 惟岳

維照と書く由、目錄に見ゆ。紀氏。無官の六位とぞ。

コンキンノミギノオホイマウチギミ 近院右大臣

深能有。文徳帝の皇子。寛平九年六月薨す。年五十三。近院の家は、拾芥抄に「春日北、烏丸東院松殿」と見えたり。

サキノオホキオホイマウチキミ 前太政大臣

藤原良房。右大臣冬嗣の子。天安元年太政大臣に拜せらる。尋いで、従一位となる。貞觀十三年三宮に准じ、年官年爵を賜はる。十四年九月薨す。年六十九。忠仁公と諡す。世に染殿の大匠と呼べり。

サダカタ 定方

内大臣藤原高藤の二子。延喜のはじめ、左近少將、近江介、延長二年、大納言より右大臣に任ぜらる。承平二年八月薨す。年六十三。従一位を贈らる。三條右大臣と稱す。

サダキ 貞樹

小野氏。石見王の子。嘉祥二年春宮少進となり、後、甲斐守に

再任して、貞觀二年厩後守に遷む。

サダブン 貞文

又、定文。刑部卿茂世王の孫、左中將平好風の子。容姿、美にして、平仲の號名世に高し。左兵衛佐、三河権介となり、延長元年九月卒す。

サヌキ 讃岐

讃岐守安倍清行の女。

サネ 實

參議左衛門督源舒の二男。寛平中、藏人、左近衛少將を経て、昌泰二年信濃守となり、同三年卒す。

サンデウノマチ 三條の町

從四位上紀靜子。名虎の女なり。文徳帝の更衣となり、惟喬、惟傑親王、及び、三内親王を生む。貞觀八年二月卒す。

シゲカゲ 滋蔭

小野氏。掃部頭に、寛平八年卒す。

シゲハル 滋春

在原業平の二子。大和物語に、在次君とかけらる。

ショウエン 勝延

笠氏。寛平中律師となり、昌泰元年少僧都となる。延喜元年二月入滅す。年七十五。紀氏にて、承均法師の兄なりといふ説も

あり。

シウホウ 聖寶

光仁帝第一の皇子春日親王の後、兵部大丞高登王これなり。出家の後、寛平六年權律師、延喜元年東大寺大別當となり、同二年僧正になさる。同九年七月入滅。年七十。或は曰く七十六。

シロメ 白女

大和物語に、源告が女にて、攝津江口の遊女なる由見えたり。これを、大江玉淵の女といへるは、大鏡などに、白女の歌を、玉淵の女の歌と並べ擧げたるより、誤れるならむ。同書に「亭子院の、河尻におはしましに、しるといふ遊もの召して、御覽じなどせさせ給ひて、遂に遠く侍ふよし、歌に仕うまつれ、と仰言ありければ、詠みて奉りける「源千鳥とびゆくがきりあればこそ雲たつ山をあはとこそ見れ、いみじうめでさせ給ひ、物かづけさせ給ひき」と見えたり。

シンセイ 眞靜

たゞし、靜は、吳音にシヨウと讀まれば、法師名に相かなはず。或は、眞勢か。御導師に補せらる。河内國の人とぞ。

シントイ 神退

近江國滋賀郡の人。文徳實錄に、嘉祥三年五月、雨を晴らしめ給ふに、時に應じて雨ふる。その日、諸神の爲に、七十人を僧となし、おの／＼、神の字を冠らしめて、名となさせ給ふこと見

(九九九)

たり。この法師も、その一人なるべし。

菅根

右兵衛督藤原良尚の子。元慶に文章生に補せられ、昌泰に文章博士となる。菅原道真の左遷の時、これを救はむとて、宇多法皇の参内せられしに、菅根、藏人頭にて、これを奏上せざりし科によりて、罪せられしが、直に本官に復し、官参議にいたる。延喜八年七月卒す。年五十四。従三位を贈らる。

菅原朝臣

菅原道真なり。かく、氏姓をのみかけるは、異體なり。左遷の厄に遭ひて、延喜三年二月、太宰府にて薨す。年五十九。その後、延長元年本官に追復し、正二位を贈らる。この集の頃は、未だ、その恩赦得ざりしころなれば、かくは書けるか。傳は、人の、運く知るところなれば略く。

關雄

刑部卿藤原真夏の子。天長二年文章生の試に及第す。よく、文を屬し、性、閑適を好み、東山の舊居に籠れるを以て、東山進士と呼ばる。その舊居は、後の禪林寺、今の永觀堂の地なり。承和中、淳和上皇の御により、途に出で仕ふ。累遷治部少輔兼書院別當となり、仁壽三年二月卒す。年四十九。關雄、また、琴を鼓するを好み、又草書を能くす。

承均

元慶の頃の僧。或抄に、貫之の甥といへり。

素性

運昭在俗の時の子にして、名を弘延といひ、清和の御時の殿上人なり。大和物語に、運昭のことをいひて「世にいますかりける時の子どもありけり。太郎は、左近將監とけて、殿上してありけり。かく、世にいますかりとまきく時だにとて、母もやりたりければ、いきたりけるに、法師の子は、法師なるぞよきとて、これも、法師になしてけり」と見えたり。石上の真因院に住せしに、宇多上皇、宮遊遊覽の序、住所の名をとりて、真因朝臣と召され、和歌を献せしめられき。又、延喜中、既御屏風に書し、又歌を献じたり。

衣通姫

九条帝の妃にして、忍坂大中姫皇后の妹なり。名は弟姫。その容姿麗妙にして、光、衣を徹ししより、世人「ソトホシノイラツメ」と稱せり。

大輔

但馬守源朝が女。輔は介の誤か。さらすば訓(オホスケ)なり。

篁

参議小野守の子。弱き時、父の任に従ひて、陸奥にありて、弓馬を事したりき。京に歸りて後、學問に志し、遂に、文章生より出でて、數多の官を経て、大宰少貳となりしが、遣唐使の時、大使と争ひ、言不敬にわたり、流人となりしを、その

三年目、召運せられて、本位に復り、すゝみて参議左大辨にいたり、仁壽二年十月薨す。詩を善くして、樂天と、その跡を同じうすといはれ、野相公の名、世に噪し。然れども、性稍介にして、人と容れず、爲に、野狂の名を得たり。狂と蓋と、顔相通するなり。

高世

参議菅野真道の子。弘仁十一年周防守に任ぜらる。

直臣

菅野氏。三代實錄元慶三年十一月の條に、中宮大進菅野朝臣直臣に、從五位下を授くること見えたり。

忠房

藤原氏。寛平中遣唐使判官となり、延喜のはじめ、大和守に任ぜらる。延長六年卒す。貫之の知人。吹笛の上手にて、胡蝶樂を作ると。

忠岑

壬生氏。初め、藤原定國の隨身たり。後左近衛番長、右衛門府生、御厨子所預、攝津大目にも累遷して、六位に叙せらる。歌道は貫之の門下といふ。この集撰者の一人なり。

忠行

藤原氏。仁和三年土佐掾となり、累進して、寛平中從五位下に叙せられ、昌泰三年遠江守、延喜五年若狹守となる。

千里

参議大江音人の子。延喜三年兵部大掾となる。

經覽

阿保氏。昌泰年中右少吏兼算博士となり、累進、主税頭となりて、延喜十二年正月卒す。延喜六年の日本紀覽の歌の作者なり。

列樹

春道氏。延喜十年文章生に補し、同二十年壹岐守となり、未だ發向せずして卒す。この人氏名相配して意義なせり。

貫之

紀氏。この集の序に御書所預、次いで内膳典膳、少内記、大内記、加賀、美濃の介、大監物、右京亮をへて、延長八年土佐守、天慶三年左番頭、同八年木工權頭、同九年卒す。寛平后宮歌合の時を、その若盛と見る時は、七十餘ばかりの餘ならむ。萬葉集の後を承けて、それに勝るばかり、秩序整然たるこの集を撰びて、後世撰集の模範を示したるは、全く、この人の力なり。然れども、流石に、他にも撰者のあることなれば、まよ心ゆかずやありけむ、天慶中、更に「新撰和歌」を撰し、漢文の自序を添へたり。而して、この集の序、並に大堰河行幸序、及び、土佐日記は、その國文の妙手たることを証せり。書道、また、奥妙に達し、その假字書は、實に入神の筆なり。

利貞

紀氏。貞觀の末少内記、元慶のはじめ大内記、同五年阿波介に
て卒す。

トシハル 利春

高向氏。寛平二年利部丞に任ぜられ、延喜、延長の間、武藏
甲斐の國守を歴任せり。

トシユキ 敏行

陸奥出羽按察使藤原富土麻呂の子。清和帝の代に出仕して、宇
多帝の朝、近衛中將、藏人頭を経て、從四位上右兵衛督にいた
り、昌泰四年卒す。或はいふ、延喜七年卒すと。香道の名手。

トモノリ 友則

紀氏。土佐兼となり、少内記にすむ。延喜の初大内記に轉じ、
六位に叙せらる。この集の撰者の棟梁たり。但、いまだ拙了せざ
るうちに卒去せしものと見えて、真傷の部に、その悼歌見えた
り。

ナカキ 中興

平氏。忠望王の子、實は右大辨秀長の一男と。昌泰に藏人と
なる。それより、春に國守を歴任して、延喜十九年左衛門佐、
廿二年美濃權守に任ぜらる。

ナカヒロ 仲平

關白藤原基經の子。昌泰の末藏人頭たり。承平七年左大臣とな
り、天慶五年正二位にのぼる。八年薙髮して解覽といひ、尋い

で薨す。年七十一。世に枇杷大臣と稱す。

ナカマロ 仲麻呂

中務大輔安倍昭守の子。靈龜二年十六、遣唐留學生となり、安
にありて、力學、大に得るところあり。名を朝、又吳、衡と改め、
秘書監に進み、新射柳を兼ね、頗る重用せらる。壽賀年中、遣
唐大使藤原清河來る。共に歸らむことを請ひ、明州に至る。王
維、包結等、贈るに、詩を以てせり。仲麻呂、月を望みて「天
の原ふりさけ見れば」の歌を詠じ、漢譯して示したるに、衆嘆
賞せざる者なし。乃ち別れて、海に航し、颶風に遇ひて、安南
に漂著す。唐人以爲く、仲麻呂溺死せりと。李白、詩を作りて勸
哭す。こゝに於て、仲麻呂、再び、唐に還り、左散騎常侍、安
南都護に任じ、光祿大夫、御史中丞、北海郡開國公に至り、三
千戸を食む。寶龜元年正月年七十を以て卒す。代宗の代、湖州
大都督を贈る。承和三年、遣唐使に因つて、正二位を贈らるゝ
いふ。

ナガモリ 長盛

橘氏。延喜中五位長門守に至る。文章博士直幹の父。

ナザ子 名實

矢田部氏。元慶八年文章生に補せられ、累進、六位の大内記とな
りて、昌泰三年卒す。

ナホイコ 前子

藤原氏。貞觀の末に從五位下、延喜のはじめ正四位下に叙せら
る。典侍。

ナラノミカド 平城の帝

桓武天皇の第一の皇子。延暦四年立太子、大同元年五月即位、
同四年四月讓位、弘仁元年出家、天長元年七月崩す。御年五十
一。

ナリヒラ 業平

阿保親王の第五子。兄弟と共に、在原朝臣を賜はる。貞觀中右馬
頭に任ぜられ、又渤海國の使を勞す。元慶中右近衛中將に進み、
尋いで相模美濃守を兼ね、同四年五月卒す。年五十六。世に、
在五の君、在中將と稱す。二條后の入内前、これと通じ、相携へ
て逃亡し、捕へられて、髪を断たれて放たれしは、世に有名な
り。國史に、「體貌閑麗、放縱不拘、略有才學、善作和歌」と見
えたり。蓋し、和歌は、人麻呂以後二人なり。後人、加茂の岩
本に、祠を立てて、その靈を祀る。業平、又臂力あり、曾て、宇
多帝の、未だ微なりし時、共に殿上に相撲ひ、帝を、御椅子に投
げかけて、その勾欄を折りしとぞ。

ナリヒラノハ、ノミコ 業平の母の親王

桓武帝第七の皇女伊登内親王。阿保親王に通き、行平、業平を
生む。貞觀三年九月薨す。

ニ、デウ 二條

大納言源定の女とも、又、定の孫宿の女ともいへり。

ニ、デウノキサキ 二條后

贈太政大臣藤原長良の女にして、名は高子。清和帝の女御とな
り、陽成帝を生む。元慶元年に立后、其の後、東光寺の僧善祐
と好し、寛平八年に后位を降められしが、朱雀帝の天慶六年に、
本位を復せられぬ。また入内前、在原業平に通せし傳説あり。

ニンナノミカド 仁和の帝

光孝天皇。御名は時廣。仁明帝第三の皇子なり。文德、清和、陽成
の三朝に歷任して、一品式部卿に任ぜらる。陽成帝位を遜るゝ
や、藤原基經、帝を迎へて、これを立つ。在位三年にして崩す。
御年五十八。世に、小松の御門と申す。

ノチカゲ 後蔭

中納言藤原有種(又有種)の二子。延喜十九年從四位下備前權守
ノボル 登

仁明帝の皇子なりしが、母三國の町の過失によりて、出家して、
深寂と號す。貞觀八年還俗して、貞朝臣を賜はる。寛平五年紀
伊權守、同六年正五位下に至る。

ナルカゼ 春風

小野氏。累世の將家にして、元慶年中鎮守府將軍兼相模介に任
ぜられ、藤原保則とはかりて、奥羽の叛賊を平ぐ。寛平二年右近
衛少將陸奥權守となる。その檢非違使たりし時、參議源光が、
禁色を著せしなせめて、服用せざらしめ、論者の傳とする。

ヒガシサンデウノヒダリノオホイマウチギミ

東三條左大臣

源常。嵯峨帝の皇子にして、正二位左大臣となり、齊衡元年六月薨す。年四十三。性雅量寛弘、宰相の才能、尤も備はれりといふ。

ヒダリノオホイマウチギミ

左大臣

藤原時平。昭宣公基経の太郎なり。仁和二年殿上にて、元服を加へられ、續いて、顯要を経て、昌泰二年左大臣に任ぜられ、後正二位に至る。延喜九年四月薨す。年三十九。正一位太政大臣を贈らる。本院大臣と稱す。

ヒデヲカ

秀崇

眞岑氏。元慶三年文章生に補せられ、寛平八年正月伯耆守に任ぜらる。

ヒトザネ

人眞

酒井氏。寛平中藤原経、延喜十四年土佐守に任ぜられ、同十七年四月卒す。

ヒヤウエ

兵衛

右兵衛督藤原高經の女。大和物語に「忠房が許に侍りける兵衛」とある人なるべし。さては、藤原忠房が家人なり。「業平朝臣

家に侍りける女」といへる詞書に准へて、忠房の妹かといへる説もあれど非なり。又、後撰集、拾遺集に見えたる藤原兼茂の女なる兵衛は、別人ならむ。

ヘンゼウ

遍照

(ムネサガを看よ。遍照と書くは通用なり)

ホドコス

惠

大納言源弘の孫。延喜四年主殿助に任ぜらる。延長六年丹波守に任ぜられ、同九年卒す。

マサズミ

當純

右大臣源能有の五子。寛平昌泰の間、大皇太后宮少進、大藏少輔、縫殿頭を経て、延喜元年攝津守、同三年少納言に任ぜらる。

ミクニノマチ

三國の町

三國は氏、町は名。仁明帝の更衣、貞朝臣登の母。

ミチノク

陸奥

從五位下橘葛直の女。

ミツネ

躬恒

八河内氏。寛平中甲斐権少目となり、延喜の朝に召されて御書所に候し、御厨子所預にうつり、和泉の大掾となる。歌道の名手として、貫之と雄を争ひ、論者、その軒轅すべからざるをいへり。この集の撰者の一人なり。

ミノヲ

岑雄

上野氏。承和の頃の人とぞ。

ムチサダ

宗貞

大納言眞平安世の男。仁明帝の世、藏人頭にて、龍幸を得たり。帝崩せらるゝや、出家して、遍照と號す。今昔物語に、眞平少將は、文徳帝の太子の時、おぼしめしに協はず、仍て、仁明帝の崩後、出家したる由見えたり。さる事もやありけむかし。元慶、仁和の間僧正に任ぜらる。光孝帝、特に、その七十賀を、仁徳殿にて行はせ給ひ、又、食邑百戸を給ひ、觀車宮門に出入するを許し給ひぬ。寛平二年正月入滅す。年七十六。花山の元慶寺の座主たるが故に、花山の僧正と稱す。

ムチハリ

棟梁

在原業平の一男。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へて、東宮舍人より、筑前守にいたり、昌泰元年卒す。この人の名、古くムネヤナと訓めるは非なり。棟梁之材などいふ義に取りたるにて、ムネとハリとなり。ヤナは、魚を捕る具にて、棟には熟せず。

ムチヤナ

棟梁

(ムネハリ)を見よ。

ムチユキ

宗子

光孝帝の皇子是忠親王の子。寛平六年源朝臣を賜はる。延喜の

頃、春に國司を歴任し、從四位下右京大夫に至りて、天慶三年に卒す。

モチユキ

茂行

又望行。紀氏。承和の頃の人にて、六位とぞ。

モトカタ

元方

筑前守在京棟梁の子。その妹大納言藤原國經の妻たるによりて國經の猶子となれりとぞ。

モトノリ

元矩

又元規。平の中興の男。延喜元年左衛門少尉、同六年藏人、同八年從五位下に叙せられ、幾くもなくして卒す。奥義抄には、藏人右衛門尉基範とあり。

ヤスヒデ

康秀

文屋氏。字を文琳といふ。貞觀二年刑部中判事、後三河掾にうつり、元慶元年山城大掾、同三年縫殿助となる。春上の詞書の趣に從へば、この頃、六七十の間なりしならむ。

ユキヒラ

行平

平城帝の長子阿保親王の子。天長三年、父親王の奏によりて、仲平、業平の兄弟と共に、在原朝臣を賜はる。仁明より宇多まで六朝に歴仕して、正三位中納言兼按察使となる。寛平五年卒す。年七十六。國史、その經濟の才に長じて、且、風流の閑あることないへり。

ヨシカ 良香

桑原秋成の子。弘仁中、氏を都と改めき。良香、はじめ、名を言造といひしな、渤海國の使を掌りし時、「姓名相配、其義乃美」とて、奏して、今の名に改めたり。貞觀二年文章生に補せられ、累進して、文章博士從五位下兼大内記越前權掾となり、元慶三年二月卒す、年三十六。その詩作、警句多し。「氣凌風統新柳壁、冰消波洗春苔壁」の類、これなり。

ヨシカゼ 良風

一に好風、右近衛少將兼陸奥守藤原滋實の子。寛平、延喜の間、左兵衛右衛門の尉を歴任し、春宮の帶刀たり。のち出羽城介に至る。

ヨシキ 美村

小野篁の孫。寛平中文章生に補せられ、後、諸官を経て、筑前守兼太宰少貳となり、延喜十年正月卒す。或は、延喜二年卒すともいふ。

ヨシナ 良名

物部氏。六位の人とぞ。

ヨシヒト 淑人

中納言紀長谷雄の二子。延喜九年左近將監、天曆二年河内守に至る。

ヨシモチ 淑望

中納言紀長谷雄の子。或はいふ、實之の猶子と。この集の漢文の序を撰ぶ。寛平八年文章生、のち大學頭、東宮學士を経て、信濃權守を兼ね。延喜十九年卒す。

ヨルカノアソン 因香朝臣

藤原高藤の女とぞ。貞觀中從五位下に叙せられ、寛平九年十一月從四位下掌侍となる。後典侍になされたるならむ。母は尼歌信なり。

ヨロツヲ 萬男

難波氏。傳未詳。

ヲムネ 雄宗

下野氏。傳未詳。

跋

おのれ、蚤くより古今集を研鑽して、窃に思へらく、契沖律師のは、萬葉代匠の餘材にとゞまり、賀茂真淵のは、更に、そを紹述せし打聽に過ぎず、本居宣長のは、その語學の楛餘にうつし出でし遠鏡のみ、香川景樹に至り、始めて、専心に攻究せしが如しと雖も、所謂正義を樹つるに急にして、まかも、體裁を備へず、況や、その内容形式に立ち入りて論評したるが如きは、僅に、百中に、二三を數ふるのみと。乃ち、深く、以て憾としたりき。

たま／＼、去る二十八年の夏某會の希望により、この集を講ずることありき。よりに、或は、諸説を折衷し、或は、謬説を排し、或は、新説を立て、更に、私見によりて、論評を下せるに、皆人耳新しと聞きなしつ。茲に、はじめて、評釋の業を思ひ立ちぬ。

抑も、延暦遷都以後、今日に至るまでの國歌界を支配するものは、實に古今

和歌集なり。あはれ、本集の勢力範圍、かくの如く、それ大いなり。本集の研鑽は、即ち、上下千五百年間の國歌を研鑽するに値し、本集の批判は、即ち、上下數十萬首の國歌を批判するに該當す。こゝに於てか、わが評釋事業の容易ならざること、に想到し、その責任の重且大なることを覺悟したり。

乃ち、評釋事業の第一著手として、前賢の諸説を網羅蒐集し、本文の異同を考訂して、一の稿本を作らむと志しつ。まかも、傍ら、その研鑽をも續けしかば、意外に、長時日を費し、殊に、素部上の稿本の如きは、鎌倉に滞在中、盜難に遭ひて失ひしが如き打撃を受け、漸く、三十二年秋冬の交に至りて、その大部分を完成したり。

又、五十音圖の小表一千葉を製しつ、各首の聲音轉換の逕路、即ち、調子を調査し、音數の多少を検するなどの用に供すべく。

準備は、既に成れりこゝに、始めて、評釋の筆を起し、その第一卷は、三十三年の秋において、脱稿し、發行、世に問ふこととなりしは、實に、三十四年一月の事

なりき。幸にも、世は、好評を以て迎へたりき。

かくて、一氣呵成に、續々脱稿すべしと豫期せしを、思ひきや、多くは、研鑽猶足らざる憾ありて、執筆意の如くならざらむとは、稿を屬するに、一日に就るところ、僅に一首乃至二首、或は、一首にして、日をわたるものすら少からざりき。まかも、稿を脱して、印刷に附せむとするに、臨み、更に一校するに、意に満たざるもの、十に五六、即ち、雌黃を施し、塗抹縦横、殆ど完膚なきに至りぬ。爲に、滯又滯、遷延又遷延、漸く、本年に至りて、全部脱稿を告げぬ。今、その每卷發行の年月を記せば、實に左の如し。

- 第一卷 三十四年一月
- 第二卷 三十五年八月
- 第三卷 三十七年十一月
- 第四卷 三十九年九月
- 第五卷 四十一年一月

(四)
五卷一千餘頁、その三分の一は、解釋に屬し、三分の二は、全く、著者の創見にかゝれる批評に屬せり。あはれ、かの類書の如きさのみ識見を要せざる纂輯物すら、猶幾年を費しつと號するならずや。況や、評釋事業は、一言半句も、腦漿の餘瀝にあらざるはなく、識見の片影ならざるはなし。思へば、不才おのれが如き者には、實に、過分の重擔なりしよ。されば、本書完成の遅延は、著者が怠慢にあらずして、漸く、精を加へたる所以なることを、識者の夙に、知了せらるゝ事ならむと信ず。さはいへ、かばかりの一小著述世の、才高く、學博き先生にとりては、何かあらむ。只これ、尋常茶飯ならましを。

終に臨みて一言す。魚を捕るには、筥を以てし、獸を擒るには、蹄を以てす。詩歌の意義を知るに、評釋を以てするは、素より、そのところならむ。然るに、世に、評釋を無用と罵るものあり。そは、筥蹄なくして、漁獵せむとするものなるなからむや。無智なること、太古の蠻人にも超えたり。そは、猶忍ぶべし。他に對ひて、これを唱ふるに至りては、赤手、魚獸を捉へよと強ふる無法者なり。盲者の

杖を奪はむとする亂暴者なり。論外なり。然れども、讀者は、また、魚を得て、筥を忘れ、獸を獲て、蹄を遺るゝ覺悟なかるべからず。偏に、筥蹄に執着する者は、遂に、目的の獲物を、眼前にして、逸すべし。かゝれば、既に、評釋によりて、その意義と詩美の指示とを得ば、更に、文字を離れて、冥想一番、詩歌の眞諦を會得せむことを要す。

明治四十年十二月

元臣しるす

おもひのいろの おもひのみこそ おもひはかけじ おもひはなれぬ おもひみだれて おもひやる —しらのしらやま —さかひはるかに おもひやれども おもふてふ —ことのはのみや —ひとのこころの おもふてふこと おもふどち —はるのやまに —ひとりひとり —まとぬせるよは おもふとも —かれなむこと —こふともあはむ おもふなかなは おもふには おもふはやまの おもふひとこそ	おもふより おもへども —おもはずとのみ —なほうとまれぬ —ひとめづつみの —みなしわけねば おろかなる	か かがみにみゆる かがみのかげに かがみやま かからぬやまの かがりびに かがりびの かかれるえだに かきくらし —ことばふらなむ —ふるしらゆきの かきくらす かきほにまける かぎりなき	—おもひのままに —きみがためにと —くしめよそに かぎりなく かきこそはみめ かくこひむ かくしつ —とにもかくにも —よをやつくさむ かくてもへぬる かくばかり —あふひのまれに —なしと思ふよな かくるとすれど かくれぬの かけておもはぬ かけてねにのみ かけてのみやは かげばかりのみ かげみしげぞ かけりても かげるふの かきへなつかし かしらのゆきと	かすかすに —おもひおはず —われをわすれぬ かすがの —とぶひののもり —ゆきまをわけて —わかなつみにや かすがのは かすさへみゆる かすはたらでぞ かすみたち かすみたち かすきたよりの かすのうへに かすのおとにぞ かすのまにまに かすはこころに かすふくこと —うきしつむたま —物おもひぞつく かすふげど かすふげは —おきつしらなみ	—おつるもみちは —なみうつし —みねにわかる かぜよりほかに かぜなまつこと かぞふれば かたいとを かたちこそ かたへすしき かたみこそ かぢにあたる かづげども かづこえて かづみながらに かづみるひとに かづみれど かなしきものと かねてうらふ かねてぞみゆる かねてより かのかたに かはかきむし かはかきの かはつなく
--	---	--	--	---	--

かはとみななら かはのせに かひがねを —さやにもみしが —ねしやまこし かへすがへすぞ —つゆはそめける —ひととはひしき かへすははなの かへるがへるも かへるさまには かへるみちにし かへるやま —ありとはきけど —なにそはありて かみがきの かみぞしるらむ かみだにけたぬ かみなづき —いぐれにぬるる —しぐれのあめの —しぐれふりおけ —しぐれもいまだ かみなひの —みむるのやまを	—やまをすぎゆく かみのまへに かみはうけすぞ かみよのことも かみのなの かまへるそでの かまらるる —きつつかれにし —たつひはきかじ —なればみにこそ —ひもゆふぐれに —かくもわれは —うつろひにけり —みづくるとは —からくれなぬの —からはほのほと —かりくらし —かりそめの —かりてはす —かりにだにやは —かりにのみこそ —かりのくる —かりのなみだや —かねたてあまの	か かたにしひとは かれはてむ かれゆくきみに かたづねてぞ かただににほ かただにむすめ かたあへぬゆきの かたかへりてぞ かたすはありとも かたぬものから かたはつる かたはつる かたのこののは かたゆるそらに かたしにおふてふ かたしひめまつ かたへゆく かたもとまらぬ かたにもあらず かたのふげふとは	き きふこそ きふふといひ きふのふちぞ きみがうみし きみがおしひ きみがかたみと きみがこころに きみがこころは きみがこころに きみがさす きみがため きみがちとせの —ありかすにせむ —かきしとぞみる きみがなも きみがみかげに きみがみかげの きみがみよなは きみがやちよに きみがゆききを きみがゆく きみがよに きみがよに きみがよは きみがよまでの	き きみがわかれし きみがわかれを きみこすば きみこふる —なみだしくば —なみだのこころ きみといは きみならで きみにこひつ きみにつかへむ きみにより きみままで きみやこし きみやこむ きみわたりなは きみをおきて きみをおもひ きみののみ —おもひねにみし —おもひこしちの きみなばまじ きみなばやらじ きよたきの
---	---	---	---	---

しぐれのあめを しげきのべと しげきわがこひ しげきまされど したにかよひて —こひしきものを —こひはしぬとも したにながれて したにのみ したのおびの したばのこらす したはれて したゆふひもの しづこころなく しでのたをきな しでのやま しにはやすくぞ しぬとぞただに しぬるいのち しののめ —ほがらほがらと —わかれををしみ しのびにそでは しのぶれど	しのぶれば しばしみつかへ しばつやま しひてゆく しまがくれゆく しまがくる しまはつくと しものたて しもやたひ しらかはの しらくもに しらくもの —こなたかなたに —たえずたなびく —やへにかさなる —やへふりしける しらすやひとを しらすたま しらすゆめ しらすゆな しらすなみに	しらすなみの しらすやまの しらすゆめの —ところもわかず —ともにながみは —ふりしくときは —ふりてつとれる しりてまごふは しりにけむ しるしなき しるしらぬ しるといへば しるもしらぬ	しほやくけぶり すみけむひとの すみぞめの すみのえの —きしによるなみ —まつほどひまに —まつをあきかせ すみよしと すみよしの すみひとさへや すむわれさへぞ すめばすみぬる すがる すまへより すまつむはなの すまのまつやま —すかとぞみる —なみもこえなむ	せみのころ せみのほの —ひとへにうすき —よるのころもは せむかたなみぞ せなせけは	せきのこといほぬ そこにかよふと そののかけさへ そこひなき そでかとのみぞ そでのみぬれて そではかわかじ そでひぢて そでふりはへて そのそこに そへにとて そまびとは それかあらぬか それなだに そなだにのちの
--	---	--	--	--	--

た

たえずなみだの たえずゆく たえてつれなき たえてみだれむ たえぬころの たがあきに たがさとに たがそでふれし たがたまづきを たがために たがため たがぬきかけし たがまことなか たがみそぎ たがつこころな たがつせに たがつせの —なかにもよどは —はやきこころな	たきのおとには たきのしらたま ただいっはり ただこにしも たたまをしき たたるにわれは ただわびびとの たぢいでてきみ たちかくすらむ たちかくれつ たちかへり たちまかゆへき たちどまり たちなばみゆき たちなむのちは たちぬはぬ たちわかれ たちわかれなば たちわのそらし たつことやすき たつぞなくなる たつたがは —にしきおりにかく —もみぢはながる	—もみぢみだれて たつたがはにぞ たつたのやまに たつたのやまの たつたひめ たづぬるひと たづねくればぞ たつとはやく たてれなれども たなばたつめの たなばたに たなびくやまの たにかに たねしあれば たのむかけなく たのめし たのめしことぞ たのめつ たはぶれにくき たびゆくひとを たまかづら —いまはたゆとや —はふきあまたに たまくしげ	たまだれの たまにもぬける たまのゆくへを たまのをばかり たまほこの たみのしに たむけには たもとのみこそ たもとゆたかに たもとより たよりにも たらしれの たれかことごと たれかははるを たれかまさと たれかわらびと たれこめて たれしかも たれにおほせて たれにまそへて たれみよと たれなかも たれなまつむし たなりてむ	ちぎりけむ ちぐさにものを ちぢのいろに ちとせのかけに ちとせのさかも ちとせのためし ちとせをかねて ちどりなく ちのなみだ ちはやぶる —うちのはしもり —かみなひやまの —かみのいかに —かみのきりけむ —かみよもきかず —かものやしろの —かものなげく ちらぬかげさへ
---	---	---	---	--

なぐるさま	九七
なしとおもふ	二九
なしむから	三六
なしむらむ	三六
なしめども	三六
なちこちの	三六
なとこやまにし	三六
なとめのすがた	三六
なのへにたてる	三六
なのへのしかは	三六
なばすてやまに	三六
なふのうちに	三六
なみなへし	三六
—あきののかに	三六
—うしとみつぞ	三六
—うしろめたくも	三六
—おほかるのふに	三六
—ふきすきてくる	三六
なられぬみづに	三六
なりつれば	三六
なりてかさむ	三六
なりてみば	三六
なりとらば	三六

明治四十一年六月廿五日訂正印刷
明治四十一年七月五日訂正發行

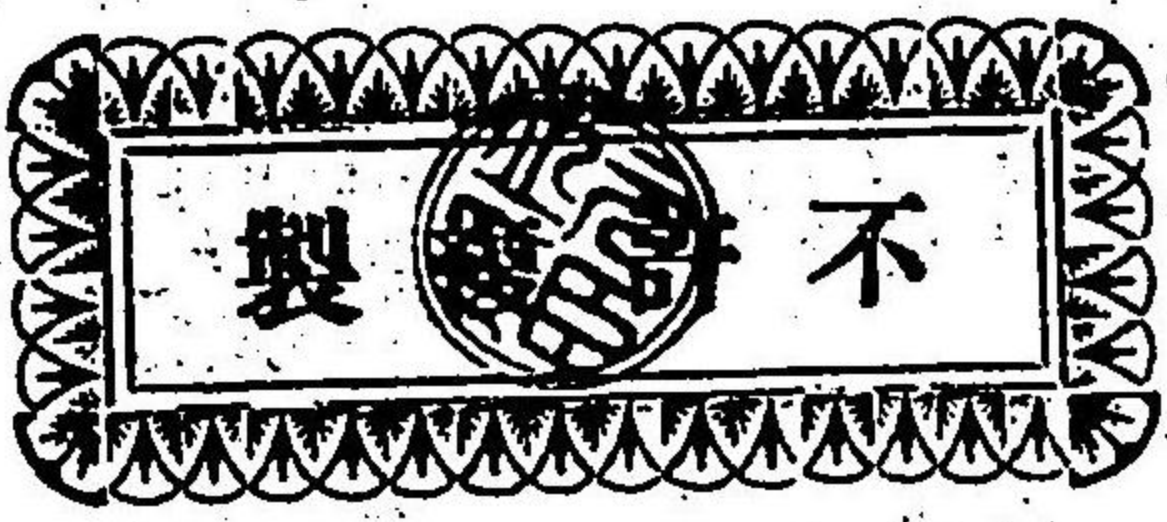
定價金貳圓八拾錢

著者 金子元臣
東京市本郷區弓町一丁目十二番地

發行者 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 三島宇一郎
東京市神田區表神保町二番地

印刷所 弘文堂
東京市神田區表神保町二番地



發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替貯金口座四九九一番

明治書院

電話本局 二四三八番

金子元臣先生著述

歌がたり
定價金三拾五錢郵稅四錢

本書は歌學に熱心なる著者が、廣く群書を涉獵して、その深遠なる學識と精緻なる觀察とによりて、最も有益にして趣味ある、古人の歌歌上に於ける苦心、逸話を捉へ來りて、著者獨特の奇癖なる評論を加へ、あるは、古今の歌壇に上下し、東西の詩界に縱横して、比較論評を試みたるもの、歌學研究者の机上缺く可からざる珍本也

新撰 柿本人麿歌集
定價金二拾五錢郵稅四錢

歌聖人麿朝臣の歌集として完全なるものなきは世の久しく遺憾とする所也。著者深く之を敬慕して、本書を公せらるる即ち萬葉集以下の諸書を涉獵して、天集には、正確なる歌聖の所作を収め、地集には、それに準ふべきものを選り、人集には、真偽不明の者を採録したれば、尙も歌聖の作とし、一に此集に流るゝもの無し。況や附録として、古人の歌聖觀及び、落合直文先生の物せられたる、人麿朝臣事蹟の一篇を収められたれば、錦上に花を添へたり。

百人一首評釋
定價金二拾五錢郵稅四錢

各首につき丁寧な意義の解釋を下し、最も嚴正に之を評論したるもの也。猶、百人一首の來歴、著者、風体、作者等につき、詳細なる説明を下し、古來の誤見を打破したり。百人一首の註釋書世に多しと雖も、本書の如く、正確にして親切なるは、また他に求む可からず。

古今歌文書綱要
定價金五拾錢郵稅六錢

古來國文因歌に關する書籍の世に出でたる者、汗牛充棟も當ならず、之を研究せむとする者、其よる所に苦む。著者之を慨歎して、此著あり、乃ち大綱を示し、細目を分ち、年序によりて、此著を掲げ、先づ内容の梗概を分し、次に、其註釋書の限を列挙して、善惡其否をさへに指定したれば、目的の下に、古今二千年間の歌文書を總括するべく、實に學海の好指針也。學者一たび本書を細かにば、光陰を徒消する憂なく、亡羊の嘆發らざるべし。

▲明治書院出版要目▼

落合直文先生著 大鏡詳解 全一冊 定價金壹圓六拾錢 郵稅金拾貳錢

和田英松先生著 増鏡詳解 全一冊 定價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢

松本愛重先生闕 水鏡詳解 全一冊 定價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢

和藤英球先生著 榮華物語詳解 全十七冊 定價金八拾貳錢 郵稅金三拾貳錢

和田英松先生著 官職要解 全一冊 定價金壹拾錢 郵稅金拾錢

萩野由之先生闕 十訓抄詳解 全一冊 定價金拾貳錢 郵稅金拾貳錢

東京明治書院發行

關根正直先生著	訂改更科日記略解	全一冊	定價金三拾五錢
佐々政一先生著	うづら衣評釋	全一冊	定價金三拾錢
佐々政一先生著	評釋 天の網島	全一冊	定價金三拾六錢
鳥野幸次先生著	東關紀行詳解	全一冊	定價金三拾五錢
金子元臣先生著 花岡安見先生著	古今歌文書綱要	全一冊	定價金五拾錢
和田英松先生著	建武年中行事註解 <small>(附錄) 增註日中行事略解</small>	全二冊	定價金八拾五錢
松井簡治先生著	庭訓往來諸抄大成	全一冊	定價金四拾錢

花岡安見先生著	國語學研究史	全一冊	定價金三拾錢
小中村清矩先生著	歌舞音樂略史	全二冊	定價金八拾錢
落合直文先生著	新編假名遣	全一冊	定價金三拾錢
國文學雜誌社編	國漢教員試驗問題集	全一冊	定價金貳拾錢
落合直文先生校	土佐日記讀本 <small>附錄註釋</small>	全一冊	定價金拾五錢
落合直文先生校	十六夜日記讀本 <small>附錄註釋</small>	全一冊	定價金拾五錢
落合直文先生校	方丈記讀本 <small>附錄註釋</small>	全一冊	定價金拾三錢

落合直文先生校 竹取物語讀本 全一冊 定價金拾五錢

附錄註釋

落合直文先生遺著 萩之家遺稿 全一冊 定價金壹圓貳拾錢

落合直文先生遺著 萩之家歌集 全一冊 定價金八圓

金子元臣先生著 古今和歌集評釋 全五冊 定價金貳圓廿錢

卷一、二各金四拾錢○卷三、四各金四拾五錢○卷五、五拾錢○郵稅各六錢

鹽井正男先生著 新古今和歌集詳解 全七冊 定價金三圓廿錢

卷一金三拾五錢○卷二、三、四各四拾五錢○卷五、六、七各五拾錢○郵稅各六錢

武島又次郎先生著 國歌評釋 全三冊 定價各金四拾錢

金子元臣先生著 柴山啓一郎先生著 百人一首評釋 全一冊 定價金二拾五錢

服部躬治先生著 戀愛詩評釋 全一冊 定價金三拾五錢

小杉榎郎先生著 神谷保朗先生著 旋頭歌評釋 全一冊 定價金三拾五錢

國詩會選 國詩 全一冊 定價金六拾錢

金子元臣先生著 歌 全一冊 定價金三拾五錢

尾上八郎先生著 梨壺の五歌仙 全一冊 定價金三拾錢

落合直文先生著 藤井靜子先生編 萩の下の露 全一冊 定價金二拾二錢

金子元臣先生撰 新撰 柿本人麿歌集 全一冊 定價金二拾五錢 郵稅金四錢

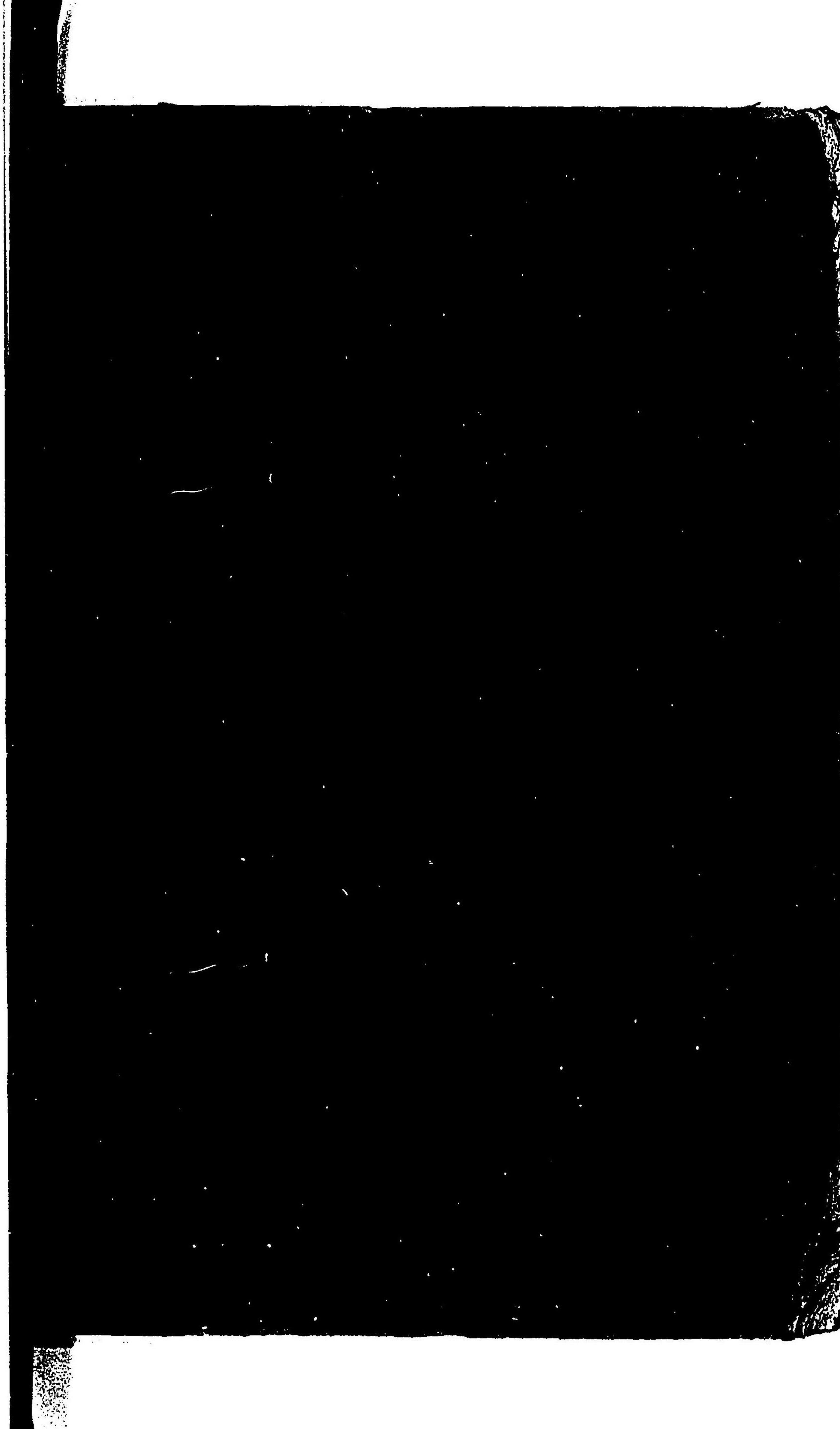
簡野道明先生著 故事成語大辭典 全一冊 定價金貳拾錢 郵稅金貳拾錢

桂 湖邨先生著 漢籍解題 全一冊 定價金拾六錢 郵稅金拾六錢

落合直文先生撰 森下松衛先生著 中等作文辭典 全一冊 定價金六拾五錢 郵稅金六錢

簡野道明先生監修 國語漢文研究會編 讀書作文用字訣 全一冊 定價金二拾八錢 郵稅金四錢

~~91~~ 911.153
169 KA 53
2





085956-000-5

911.135-Ka53-2

古今和歌集評釈

金子 元臣/著

M41

DBD-0580



